聴覚障害学生サポートネットワークの構築をめざして

― 第1回アメリカ視察報告書 ―

日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク

PEPNet-Japan：Postsecondary Education Program Network of Japan

※PEPNet-Japanは日本財団の助成によるPEN-Internationalの事業の一部で筑波技術短期大学によって運営されています

表紙の写真：ロチェスター工科大学全景（撮影：荒木勉）

全国的な聴覚障害学生サポート･ネットワーク構築のきっかけとして

日本財団は2001年からPostsecondary Education Network International for the Deaf and Hard of Hearing、通称PEN-International、日本語で言うと「聴覚障害者のための国際大学連合」という少し長い名前の事業を支援しています。

これはアメリカのロチェスター工科大学の１カレッジであるNational Technical Institute for the Deaf (NTID) と筑波技術短期大学が中心となり、聴覚障害者を受け入れいている様々な国の大学とネットワークを組んで、それぞれの国で聴覚障害者の高等教育をより発展させていこうとする事業で、現在は中国、ロシア、フィリピン、タイ、チェコの大学がこのネットワークに参加しています。

それぞれの参加大学が他国の大学との交流を通して、教育方法やノウハウを相互に提供し合いながら発展していくことが事業の中心ですが、これに勝るとも劣らないもう一つの重要な目的は各国内の高等教育環境の整備・発展です。

アメリカに比べると日本全体の高等教育におけるサポート環境はまだまだこれからといった感も致しますが、いよいよ飛躍の機運が高まって来たとも聞いています。そのような状況下、PEN-International事業の一環である今回の視察に、メンバー校である筑波技術短期大学の荒木勉先生、須藤正彦先生、河野純大先生の三先生に加え、日本福祉大学の大泉溥先生、筑波大学（視察計画当時）の白澤麻弓先生、東北大学大学院生の松崎丈さんという外部の三人の方々にも参加していただくことが出来たことは大きな収穫だったと思います。

というのも、今回の米国視察をきっかけに、これまで聴覚障害学生を受け入れ先駆的なサポートを行ってきた大学同士が互いに協力し、連携を深めていくための日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet-Japan）が設立され、2004年10月29日に第1回関係者会議が開催されるに至るという大いなる発展を遂げることができたからです。これもひとえに発起人となって種々の調整をいただいた筑波技術短期大学の先生方のご尽力の成果と敬服いたします。さらに、2005年3月にはPEPNet-Japan初年度の活動として第２回米国視察団の派遣も計画されていますが、より多くの大学・関係NPOからの参加が見込まれており、第１回を上回る成果を確信しています。

今回の視察が大いなる成果を生み出したように、今後もPEN-Internationalの事業を通して我が国の聴覚障害学生サポートがますます発展していきますよう心より願う次第です。

2005年 1月 吉日
日本財団　国際協力グループ
石井靖乃・筒井智子

写真：NTID設立調印式の様子をかたどったステンドグラス

視察報告編

NTIDにおける学生サービスの概要 8
ロチェスター工科大学（RIT）における聴覚障害学生サポートサービスの概要 10
ロチェスター工科大学（RIT）と米国立聾工科大学（NTID）学生寮（寄宿舎）の視察 22
PEPNet（Postsecondary Education Network）の概要 25
聴覚障害学生の高等教育支援におけるエンパワーメント 31

資料編

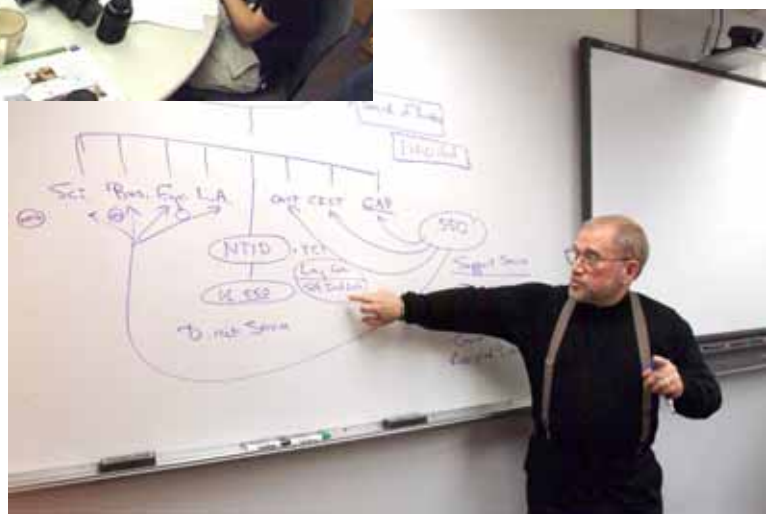
アメリカにおける手話通訳事情 40
アメリカの障害者差別禁止法 56
アメリカのろう教育システム 59
PEN-Internationalについて 62

付録

PEPNetパンフレット 69
NETACパンフレット 71
全視察日程 73
ロチェスター工科大学およびNTID視察日程 74
ロチェスター工科大学の位置 76
ロチェスター工科大学構内地図 77

写真：視察時の様子
左：日本におけるネットワーク構築可能性について議論する視察団

下：ロチェスター工科大学の組織について説明するJames DeCaro氏（PEN-International代表、元NTID学部長）



視察報告編

NTIDにおける学生サービスの概要	8
ロチェスター工科大学（RIT）における聴覚障害学生サポートサービスの概要	10
ロチェスター工科大学（RIT）と米国立聾工科大学（NTID）学生寮（寄宿舎）の視察	22
PEPNet（Postsecondary Education Network）の概要	25
聴覚障害学生の高等教育支援におけるエンパワーメント	31

NTIDにおける学生サービスの概要

河野 純大（筑波技術短期大学聴覚部電子情報学科情報工学専攻助手）

ここでは本海外視察初日にPEN－International Meeting Roomで行われたデカロ教授によるNTIDならびにRITに関する概要説明、それに続けて見学したNTIDで学ぶ聴覚障害学生のためのサポート施設に関して述べる。

Ⅰ．NTIDの概要

NTID(National Technical Institute for the Deaf:国立聾工科大学)は1965年に設立された、RIT(Rochester Institute of Technology:ロチェスター工科大学)内の1カレッジである。RITにはNTIDの他に応用科学・工学・ビジネスなどの7つのカレッジがある。現在RIT全体で約1100名の聴覚障害学生が在籍しており、その約半数がNTIDに在籍している。NTIDには副(準)学士コース(2年)、学士コース(4年)、修士コース(2年)などのコースがあり、副(準)学士コースでは専任教員が手話を使いながら直接学生を指導している。また副学士の学位を取得後、RIT内の他の7学部へ編入することもでき、この場合はNTIDのサポートを受けながら学士の学位を取得することになる(RIT内での聴覚障害学生のサポートについては別項参照)。さらに、学士コースで学ぶには基礎学力が不足している学生のための学士準備コースもあり、修士コース(ろうまたは難聴学生のための高等教育における科学修士)では聞こえない学生、聞こえる学生の両方が入学できることになっている。NTIDの学生が利用できる学習施設について次に述べる。

RIT
- Applied Science & Technology
- Business
- Computing & Information Sciences
- Engineering
- Imaging Arts & Sciences
- Liberal Arts
- NTID
- Science

図１　RITの学部構成

Ⅱ．NTIDの学生のための学習用施設

１．NTIDラーニングセンター(NTID Learning Center)

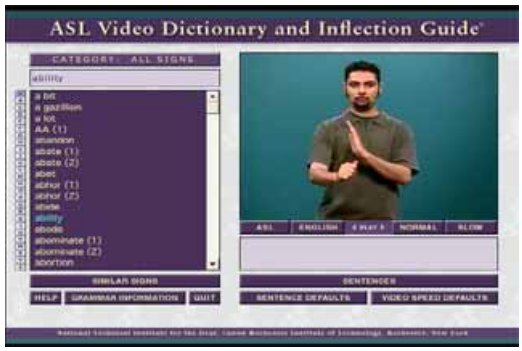
NTIDラーニングセンターはNTID/RITで学ぶ学生の学習面のサポートを目的とした施設で、NTIDとRITで学ぶ学生は自習用のコンピュータ(Mac/Windows)を自由に利用することができ、かつ補習授業(チュータリング)を受けることができる。専属のスタッフが3名、他に約30名のチューターなどが学生のサポートを担当してい

る。チュータリングにはEnglish, English Peer, Math, NCE, Accountingなどのクラスが用意されスケジュールはWebで確認ができ、マンツーマンもしくは少人数グループによる丁寧な指導を受けることができる。

図２　NTIDラーニングセンターの様子

図3セルフインストラクションラボのブース

(a)読み取り訓練ソフトの画面



(b)アメリカ手話(映像)辞書の画面

図4　セルフインストラクションラボの教材ソフト

２．NTIDセルフインストラクションラボ

セルフインストラクションラボは手話ならびに発話言語などのスキルの上達をサポートする場所であり、RITの学生や教職員が手話の学習や口話読み取り訓練、面接の指導などのために通っている。多くの種類のビデオやCD-ROM、DVD、オーディオテープ、Windows/Macアプリケーションなどの教材が揃っていて、それらの作成や編集も行っており、マルチメディアに対応できる、フレックスカム、VCR、レーザーディスク、およびマッキントッシュコンピュータを備えた学習環境(ブース)が用意されている。教材のコンテンツも多く取り揃えられており、カテゴリーごとに分類されて各単語に例文がついた手話(映像)辞書をはじめ、アメリカ手話の自習ができるもの、ビデオを見て口形読み取り読み取った英語を回答する読み取り練習ソフトや、会社での入社面接の訓練の練習が可能なものなどがある。また、セルフインストラクションラボ内には、面接訓練を行う部屋がありそこでは対面して会話する様子をそれぞれ捉えるカメラを設置して録画し再生し確認することで、学生のコミュニケーションスキルの向上に役立てている。

（URL：http://www.ntid.rit.edu/　NTIDホームページ）

ロチェスター工科大学（RIT）における聴覚障害学生サポートサービスの概要

白澤 麻弓（筑波技術短期大学障害者高等教育センター助手）

Ⅰ．はじめに

NTID はRIT（ロチェスター工科大学）内の学部の一つで、550人以上の聴覚障害学生が手話等の直接的なコミュニケーション手段を通して学習を進めている。これに対して、RIT内の他の7学部にも同数程度の聴覚障害学生が在籍しており、手話通訳などの各種サービスを受けて授業に参加している。ここでは、NTID内で実践されている「直接的コミュニケーションモデル」に対して、通常の学部にインテグレートしながら必要なサービスを受ける「サポートモデル」の概要を紹介する。

Ⅱ．RITにおける聴覚障害学生サポートサービス

米国の大学では在籍する障害学生への支援のために、学内型障害学生サポートセンターが設置され、手話通訳等の必要なサービスが提供されている例が多い（図1）。RITの場合、NTIDそのものがこのセンターにあたる機能を果たしているが、RIT内にはこの他にさらに4つのサテライト的なサポートセンターが設置されており、NTID以外の7つの学部に在籍する聴覚障害学生のサポートを行っている[1)]。この4つのサポートセンターはCBGS（Center for Baccalaureate and Graduate Studies）と呼ばれており、それぞれ専属の手話通訳コーディネーターやノートテイクコーディネーター、カウンセラー等が配置されていて、担当学部に在籍する聴覚障害学生からの依頼を受けて表1に示すような各種サービスを提供している。

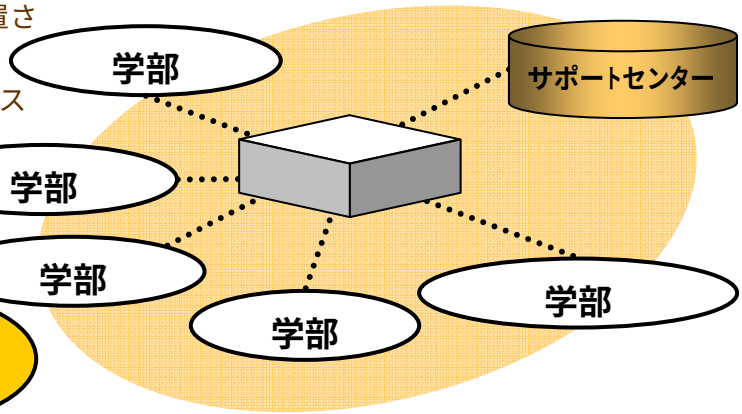


図1　学内型障害学生サポートセンターの例

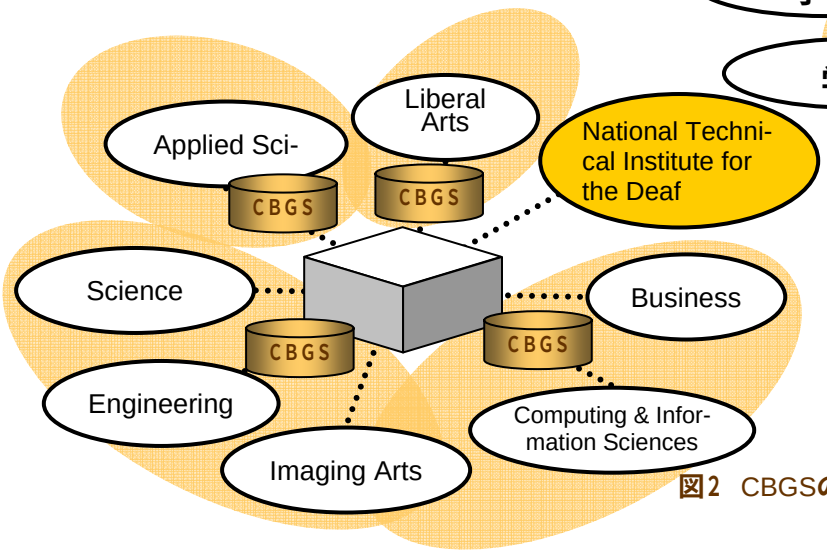


図2　CBGSの配置

表1　CBGSが提供しているサービスの内容

サービス	概要	通訳者数	提供時間数	養成等
Interpreting 手話通訳	アメリカ手話通訳、対応手話通訳、口話通訳（キュード通訳を含む）、触手話通訳など学生の好みに応じて派遣を行う。授業以外への派遣も可能。ただし、口話通訳は基本的に1年次のみの派遣で、複数の学生が同一の授業をとっていたり、通訳者が足りない場合には希望に添えないこともある。通訳依頼は履修登録の際に行い、オンラインで登録可能（通訳が付くかどうかもオンラインで確認可）。	101人（他に、フリーランス通訳者／ろうの通訳者／通訳者養成コースの学生など）	94134時間（供給率97%） 講義:75710 講義外:10811 会議等:7613	大学の通訳者養成コースを修了した通訳者等をフルタイムで雇用している。技術の程度によって4段階に分けられており、平均収入は31000$/年
Notetaking ノートテイク	一般学生をノートテイカー※として養成し、聴覚障害学生の要望にあわせて授業に派遣している。授業後ノートはCBGSからスキャンセンターに送られ、24時間以内（通常は1～2時間以内）にインターネット上にアップロードされるため、聴覚障害学生は必要なときに適宜アクセスして閲覧することが可能。ノートテイクは基本的にすでに保障を行う講義を取ったことがある学生か現在履修中の学生に依頼し、記述内容に間違いがないように授業担当教官もチェックを行うことが多い。	300～400人	55439時間 （うち5670時間は、NTIDの学生で重複障害のためにノートテイクが必要な学生へのサポート）	4時間の養成講座を受けた学生がノートテイカーとして登録。今学期よりオンライントレーニングも開始。 $6.42/h
C-printing パソコン通訳	NTIDが開発したパソコン通訳の方法で、キーボードを用いたタイプ方式と、音声認識を用いた音声入力方式の二通りがある。いずれも通常一人の通訳者が授業保障にあたる。数年前から本格的に導入されたばかりであるため、まだ提供数は少なく、手話や文字によるコミュニケーションを困難とする盲ろう学生に優先的に割り当てている。	10人程度	1596時間	オンラインによるトレーニング
Tutoring チュータリング	学生のコミュニケーション状態にあわせた学習指導を提供する。手話等のコミュニケーションが可能な教員の他、聴覚障害学生ですでに学士を取得した先輩によるチューターも行われている。学生に対して学業上の援助をするだけでなく、授業内で適切なサポートが行われているかもチェックし、不備がある場合はCBGSと協力して改善を求めていっている。		14487時間	
その他	Audiological services（補聴サービス）、Speech and language services（発音･言語訓練）、Mental health counseling and psychotherapy（心理カウンセリング、心理療法）、Personal and career counseling and academic advising（個人相談、職業相談、就学相談）、 Student Life Team（学生生活チーム:新入生へのサポート、黒人などマイノリティグループへのサポート、リーダー養成など）、Financial aid（財政的援助）、Technological assistance（技術支援:字幕教材作成支援など）、Substance and Alcohol Intervention Services for the Deaf（薬物およびアルコール依存症の学生への援助）			

※　ここでいうノートテイクサービスとは、手話通訳等の情報保障手段と併用して授業内容の記録を取るためのノートを作成するものであり、日本で用いられている筆記通訳としてのノートテイクとは異なる。

では、実際これらのサービスがどのように提供されていっているのかをみていきたい。

1. 手話通訳サービス

RITにおける情報保障で最も大きな位置を占めているのは、なんと言っても手話通訳である。NTID年報（2003年度版）よると、現在RIT内はフルタイムで働いている手話通訳者が全部で101名おり、年間94134時間もの通訳サービスを提供している。このうち75710時間はRITで行われる講義に対する派遣であるため、全体の80%程度は先に述べた4つのCBGS内でコーディネートされていることになる。図は手話通訳コーディネートのための組織図であるが、これをみてもわかるとおり一つのＣＢＧＳに手話通訳サービスのためのマネージャーが１名、コーディネーターが2～3名おかれていて、この他に会計等を担当する事務職員が二つのCBGSに一人の割合で配置されていた。手話通訳者は、それぞれ得意分野にあわせて各CBGSに20～26名ずつ登録されおり、通訳の依頼から派遣までは通常一つのCBGS内で完結する形となっていた。

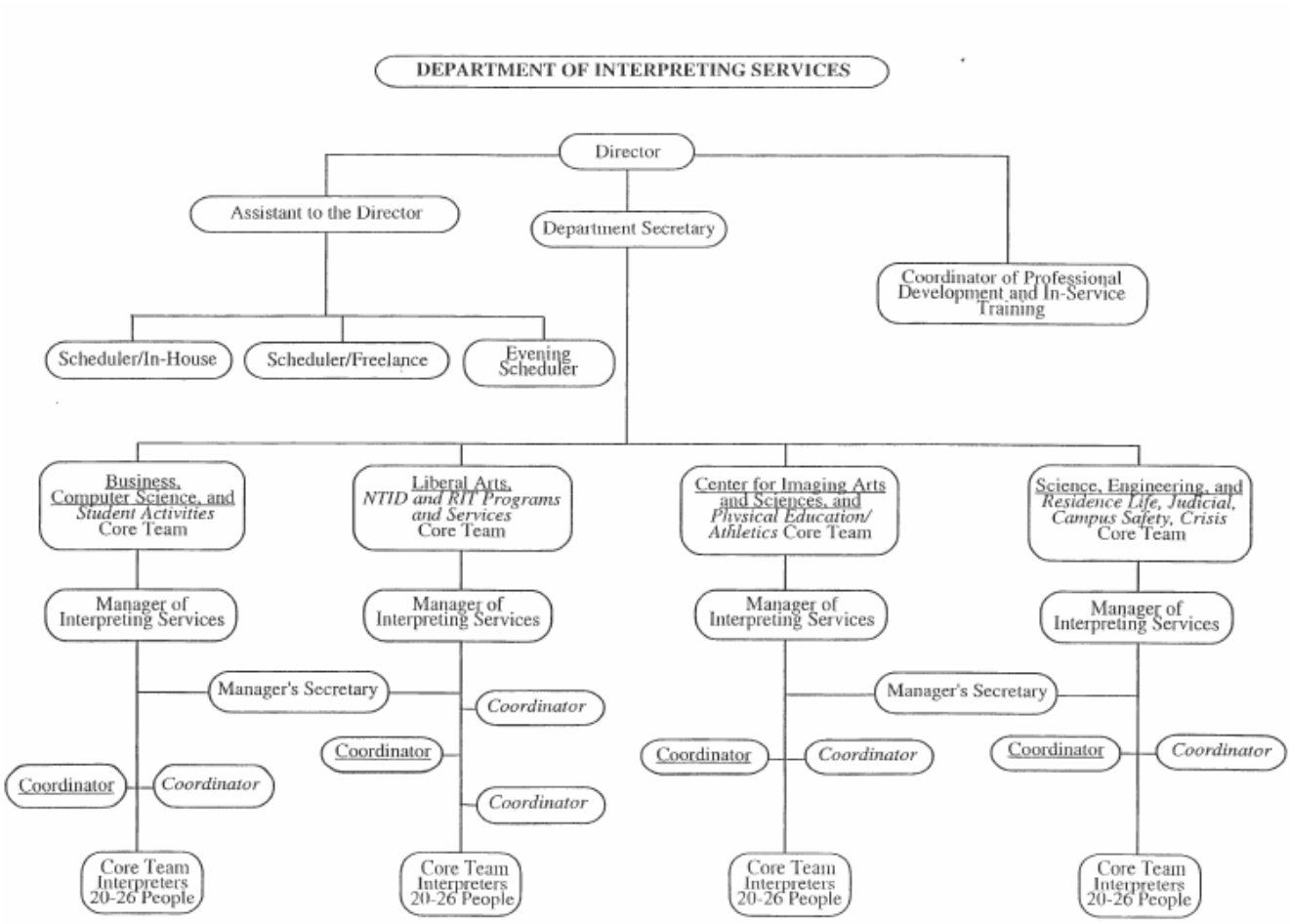


図3　CGBSの組織図（手話通訳サービス）

講義場面への通訳依頼は、すべてオンラインで行うことが可能で、しかも履修登録システム（SIS：Student Information System）に統合されているため、非常に合理的で手軽な印象を受けた。図はこの登録確認画面の一部であるが、科目番号や講義名、単位数、教官名、時間等に並んで右端にNTIDによるサポートの有無（実際にはCBGSがコーディネートする）が記述されている。そのため、学生はこれをみながら、すでにサポートがつくことが決まっている授業の場合はそのまま履修を登録し、まだ誰もサポートを依頼していない講義については必要なサポート内容を選んで登録するわけである。ただし、この時点では通訳がつくことが確証されたわけではないので、数日後に表示がIR→ISと変更されるのを学生自ら確認する必要がある。

その他、授業以外の場面への通訳派遣や、派遣された通訳者が十分に講義内容を通訳しきれない場合の通訳者変更の申し入れ、手話の好みに関する要望、通訳者の指名等のニーズについても可能な範囲で応じることになっている。

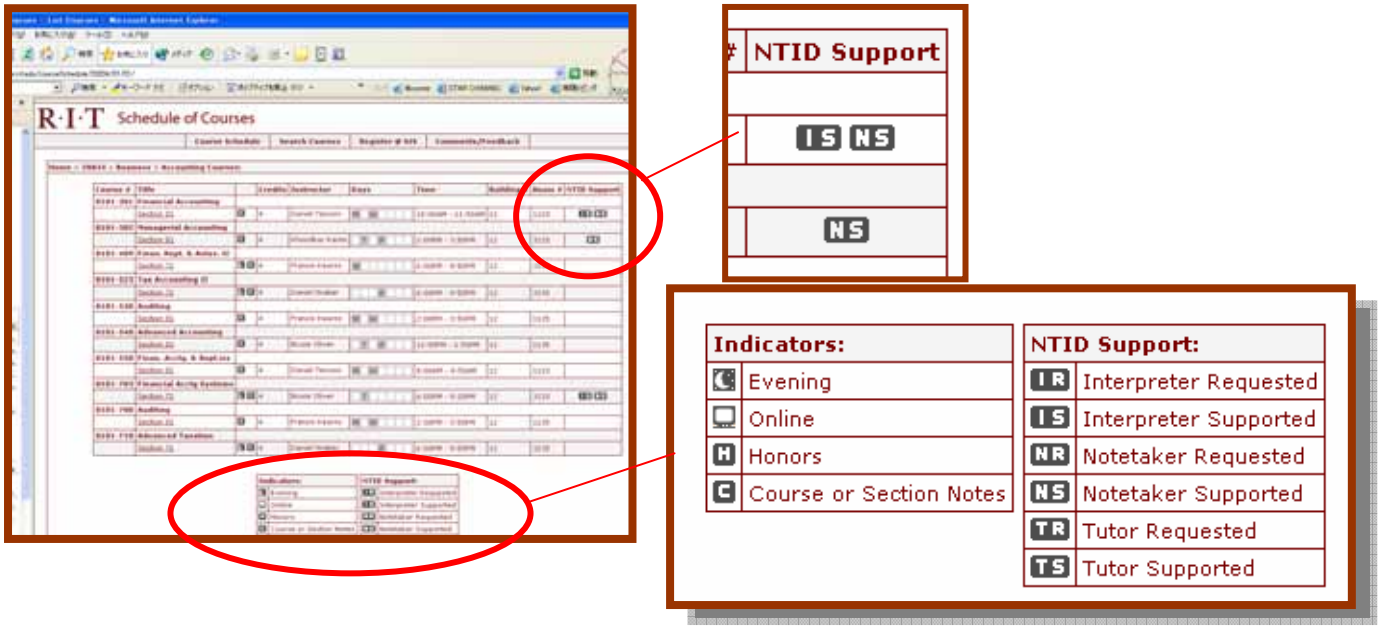


図4　SISによる聴覚障害学生サポートの依頼

ただ、手話通訳者の不足は常に深刻な問題で、CBGSのマネージャーを担当しているKen Frinton氏によると、年々サービス提供時間数を増やしてきているとはいえ、派遣数はまだ100%には達していないとのことである。今年度も全体の30%程度の講義では、依頼内容のままでは通訳者を派遣することが困難であったため、時間をずらしてもらったり、次年度に履修してもらう等の調整をして依頼数を減らした上で最終的な派遣授業を決定せざるを得なかったとのこと。ちなみに学内の手話通訳者でまかえる部分は全体の7割程度で、それ以外は外部の通訳者に非常勤で依頼する等の工夫をしているが、それでも最終的な派遣率は97%程度とのことなので、サポート体制の完備がいかに困難であるかを感じざるを得ない。

一方、通訳者は技量や専門知識の程度（学位所持の有無等）によって4段階に分けられており、年1回のEvaluationを受けることが義務づけられている。そのため、努力をして技量を伸ばした通訳者は上のレベルに上がることができるが、いつまでも最下位のレベルにとどまっている通訳者については解雇されるというルールも設定されている。給与額は年間平均$31000（一番低いレベルで＄24000）程度で、フルタイムで働いている101名については職員としての雇用であるため、保険等の身分保障もなされており、こうした労働条件は年々改善されているとのことであった。また、通訳時間は原則として週20時間以内と定められており、これ以外に学内の聴覚障害学生から個人的に通訳依頼を受けることもあるが、これも週6時間以内に限定することという規定が定められている。これは、コーディネーターの目の届かないところで頸肩腕障害などの健康障害が発生しないようにとの配慮からであるが、学外でも活動をしている通訳者については管理しきれないこともあるとの指摘がなされていた。

2. ノートテイクサービス

手話通訳に次いで重要な役割を占めているのがノートテイクサービスである。表1にも示したとおり、年間300～400人のノートテイカーが約1600コマの講義で850000ページものノートを取っているとのことである。今回の視察では、経営・情報工学分野のサポートを担当しているCBGSのノートテイクコーディネーターにお話を伺ったが、この部門だけでも今学期76人のノートテイカーを93コマの講義に派遣したとのことで、規模の大きさに驚かされる。

ただし、ここで注意すべきは米国においてノートテイクと言った場合、基本的に記録としてのノート作成を意味しており、日本で言うところの筆記通訳とはまったく異なる意味合いを有している点である。そのため、学生の多くが基本的には手話通訳によって情報を得て、講義終了後、ノートテイカーが書き写したノートをもらって復習をするといった活用方法がとられており、授業中にノートテイカーの書く文字を通して情報を得ている日本の状況とは根本的に異なっている。ノートテイカーは基本的に学生で、既に当該講義を受講した学生や、同じ専門で当該講義を履修中の学生が担当している。謝金は＄6.42/Hで低額だが、学内の学生バイトの中では2番目に高い謝金であるとのことであった。以下に具体的なサポートサービスの状況を説明する。

1)ノートテイカーの募集･養成

先に述べたとおり、ノートテイクは基本的に同じ専門の学生が担当をしているが、ノートテイカーとして登録するためには、事前に4時間の講習会(＄25)を受けることが義務づけられている。講習会の内容は、ノートテイクサービスの概要やノートテイカーとしての心構え、ノートの取り方に関する技術等で、技術について

は余白の開け方や段落の分け方、強調の方法、記号の使用方法など具体的で実践的なノウハウが伝えられているようであった。また、今学期よりインターネットを活用したオンライントレーニングも導入が開始されており（図５）、今後は通常の講習会とオンライントレーニングのうち好きな方を選択できるようになるとのことである。

ノートテイカーの募集はコーディネーターがポスター等による呼びかけによって行っているが、やはり人員数は十分ではないためチューターをしているような優秀な学生を見つけてはスカウトをして講座を受けてもらったり、講義を担当している教員に良い学生を紹介してもらう等の努力をしているとの話であった。

講座を修了した学生は、10週間きちんと出席する、ノートは必ず提出する等のルールについて確認した後、契約書に記入し、ノートテイカーとしての登録を行う。同時に学期のはじめには今学期ノートテイカーとして活動ができるかどうかを確認して可能な場合には別の申し込みフォームに記入、提出することになっている。

図５　NETACによるノートテイカーオンライントレーニング
登録すれば誰でも履修可能（http://www.ntid.rit.edu/elearning/note/）

2）授業でのサポート

実際に授業の履修登録が始まると、聴覚障害学生は手話通訳と同様のオンラインシステムを用いて、ノートテイクによるサポートを依頼する。これを受けコーディネーターがノートテイカーの配置を決定し、掲示板によってノートテイカーに通知することになる。

講義が始まるとノートテイカーは職務に従い講義の記録をとるが、聴覚障害学生の多くは基本的に手話通訳を見ているため、書かれたノートは授業後に受け取る形になっている。実際、視察中見学した講義ではノートテイカーは教室の最後尾に座ってノートを取っており、手話通訳を見るために最前列に座っている聴覚障害学生とは全く顔を合わせないまま授業が終了していた。聴覚障害学生の方も誰がこの授業のノートテイカーなのか十分に把握していなかった様子で、尋ねても「あの辺の人」というクールな返答しか返ってこなかった。

図６は実際この時に取られたノートの一部である。通訳ではなく記録としてのノートであるため、箇条書き等により授業の要点が要領よくまとめられているが、単にポイントを書くだけでなく、質疑応答場面では質問と回答の両方が丁寧に記載されていたり、教員の話した例や説明なども細かく記述されていて、通常学生が取るノートよりは詳細に書かれているようであった。また、ノートにはカバーシート

と呼ばれる表紙をつけることになっており、ここには講義名やノートテイカーの名前の他に、重要な連絡事項やノート中に使用している略号の説明等を記載する欄が設けられていた。

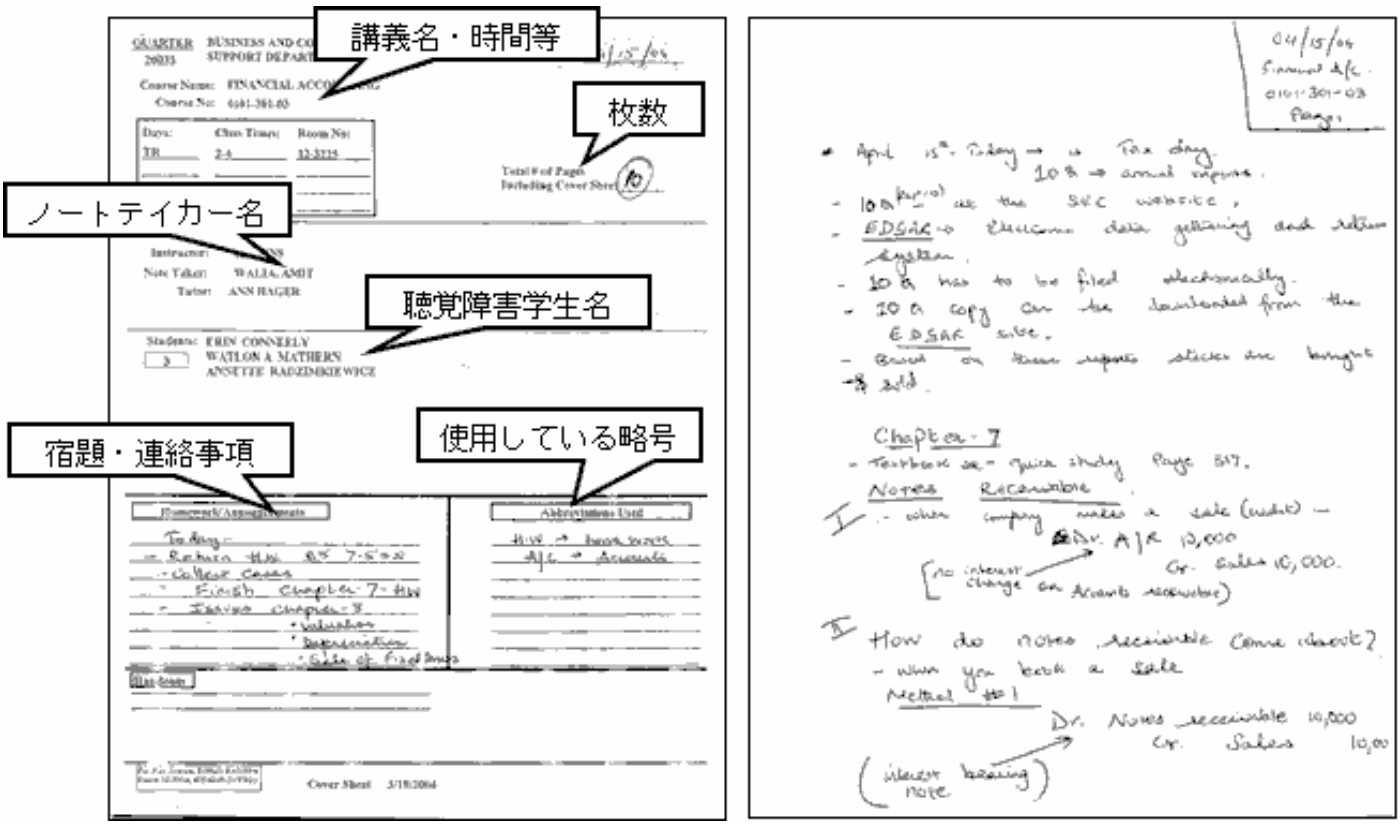


図6　ノートテイクされたノートとカバーシート

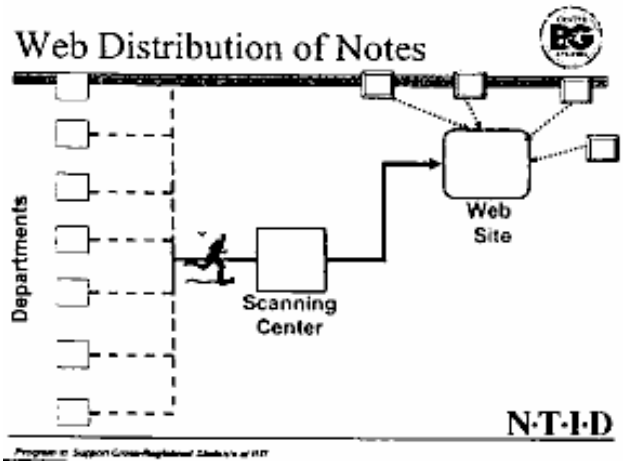


図7　スキャンシステムの概要図

授業後ノートがスキャンセンターに送られ、ウェブ上から内容を見ることができる。

授業が終了すると、ノートテイカーは聴覚障害学生ではなくCBGSのオフィスにノートを提出することになっている。これは複数の聴覚障害学生が受講していることも多いためで、提出されたノートは図７に示すように学内にあるスキャンセンターに送られ、そこでスキャナにかけられて24時間以内(通常1～2時間)にホームページに掲載されることになっている。掲載されたノートを見るためには、IDとパスワードが必要で、聴覚障害学生は履修登録と同じSISシステムを用いて各クラスごとのノートが見られるようになっていた。

このノートには、聴覚障害学生の他に、授業担当教官やコーディネーター、チューター等もアクセスすることができ、ノートの内容とあわせて聴覚障害学生がどの程度ノートを閲覧しているかといったログも調べて学生への指導にも生かすことも可能になっている。また、授業担当教官はノートに間違いがある場合、補足したり修正したりすることも可能で、聴覚障害学生の様子を気にかけてくれる先生は比較的良くノートテイカーのノートも確認してくれるとのことであった。

3）ノートテイカーの評価

1学期間の授業が終了すると、ノートテイカーは聴覚障害学生やチューター等から評価を受ける。表２，３はこの際用いられる評価シートで、受け手の評価が悪いノートテイカーについてはコーディネーターが指導を行ったり、登録を削除する等の処置をとることになっている。

その他、学期途中であっても技術レベルや態度の悪いノートテイカーに対して要望を申し出ることは可能で、何か問題があれば聴覚障害学生本人はもちろんノートを見たチューターや授業担当教官がコーディネーターの所に相談を持ちかけることができる。

4）身分保障

ノートテイカーへの謝金は先に述べたとおり＄6.42/Hと決して高額ではないが、この他に学期に1回優秀なノートテイカーを表彰するなど、ノートテイカーのモチベーションを高めるための工夫もなされているようだった。また、学生時代にノートテイクを担当していたということは、就職面接等の場面で非常に高く評価されるため、希望する学生には履歴書に添付できる証明書なども発行しているとのことであった。

表2　ノートテイクの評価項目①

Writing（書き方）	Legible（読みやすい）
	Neat（均整が取れている）
	Complete sentences / phrases（文・句が完結している）
White space（余白）	Blank lines（行間）
	Indentations（字下げ）
	Open space next diagrams（段落ごとの行あけ）
Emphasis（強調）	Key vocabulary（キーワード）
	Key concepts（重要な概念）
	Exam information（試験の情報）
	Boxed answers（答えの強調）
	Boxed formulas（公式の強調）
	Indicated speaker（話し手の区別）
	Included questions / answers（質疑の内容）
Vocabulary（用語）	Identified（用語の区別）
	Defined（定義）
	Used examples（使用された例の記載）
Used & identified abbreviations（略語の使用と区別）	
Spelling（スペル）	Collect（正しさ）
	Identified errors（誤記の訂正）
Organization（統制）	Outline format（記述形式）
	Topic headings（タイトルの明記）
	Main ideas（主要箇所の記載方法）
	Supporting ideas（補足箇所の記載方法）
Diagrams / sketches（図・絵）	Size（大きさ）
	Labels（見出し）
Cover sheet（カバーシート）	Date（日付）
	Number of copies（枚数）
	Announcements（連絡事項の記載）
Page heading（ページ見出し）	Course name（コース名）
	Course number（コース番号）
	Date（日付）
	Page number（ページ番号）
Margins（左右上下の余白）	
Unbiased（客観性）	
Details（細部）	Number of pages（枚数）
	Clearly identified references（参考文献等の明記）
	Included handouts, syllabus, etc.（シラバスや資料の添付）

表3　ノートテイクの評価項目②

I	1)	ノートテイカーから自己紹介を受けた
	2)	ノートテイカーの代理が誰であるか把握できた
	3)	ノートテイカーに対して遠慮なく指示を与えられた
	4)	ノートテイカーは聴覚障害学生に対して何か改善点がないかどうか尋ねてきた
	5)	この学生を次学期もノートテイカーとして推薦する
II	1)	文字はきちんと読めた
	2)	連絡事項がノートに記載されていた
	3)	重要な内容は強調されていた
	4)	講義の中で話された例や説明文がきちんと記載されていた
	5)	図、チャート、グラフ等が説明付きで記載されていた
	6)	新しい用語や記号等はきちんと定義が書かれていた
	7)	この講義ノートは学習を進める上で十分役に立った
	8)	全体的に書かれたノートは上手く整理されていた
	9)	ノートテイカーは遅刻せずに来ていた
	10)	復習の際自分で書き込みができるよう、十分な余白が取られていた
III	1)	この講義のノートテイクの中で、特に役に立った部分
	2)	この講義のノートテイクの中で、改善を求める部分

3. チュータリングサービス

アメリカの大学では聴覚障害学生のみでなく、健聴学生に対しても専門的学習を支えるチューターが配置されており、必要に応じて講義を補完するための学習がなされているが、RITではこのチュータリングサービスを手話通訳やノートテイク等の講義保障に並ぶCBGS内の重要なサポートサービスの一つとして位置づけ、非常に熱心に取り組みを行っていた。

今回お話を伺った経営・情報関係のCBGSでは、チュータリングサービスを提供するための担当教官が7名配置されており、専門の講義に関わるチューターを担当していた。ファカルティチューターと呼ばれるこれら教員メンバーは、いずれも手話のできる先生を採用しており、聴覚障害学生に対する指導技術も十分に身につけているとのことだった。この他に優秀な聴覚障害学生がピアチューターとして登録しており、英語や数学等の基礎学力を支える指導を行っていた。

ファカルティチューターは、聴覚障害学生のニーズと専門の教育内容、チューターの専門性等を鑑みてスケジュールを組み、聴覚障害学生に連絡したり、授業担当の教官を通してチュータリングサービスの存在を伝えたりしていた。一方で、チューターとして聴覚障害学生の学業面でのサポートを行うだけでなく、その講義

を担当している教官に対しても、聴覚障害学生への関わり方や障害の特性、通訳が入った授業での講義の進め方等を伝えていくという重要な役割を担っており、教官と学生の間の重要な仲介役として機能していることが見て取れた。

また、RITに入学してくる学生の半数は、事前にNTIDで英語や数学等の基礎学力をつけるプログラムに参加しているとのことで、講義保障のみにとどまらない手厚いサポートが行われていることがうかがえる。こうしたプログラムはカリキュラム構成が緩やかなアメリカだからこそできる取り組みであると思われるが、直接的なコミュニケーションによる指導によって、聴覚障害学生の持つ可能性をより広げることにつながるため、我が国においても検討していく価値があるのではないかと考えられた。

図8　視察時の様子

左からPEN-International代表James DeCaro氏、英語-日本手話通訳者、CBGSチュータリングサービス担当Jim Biser氏、日本語-英語通訳者、視察団メンバー

4. カウンセリングサービス

CBGSが提供しているサポートでもう一つ大きな位置を占めているのがカウンセリングサービスである。RITでは、健聴学生を含めて学内全体の心理カウンセリングを扱うカウンセリングセンターが設置されている他、各CBGS内に1名カウンセラーが配置されていたり、NTID内にもカウンセリング部門があるなど、いたる所に様々な種類のカウンセリング部門が設けられていた。聴覚障害学生に対応するカウンセラーはもちろん手話での対応が可能で、CBGSやNTIDのみでなく、学内全体向けに設置されているカウンセリングセンター内にも手話ができるカウンセラーが2名配属されていた。

RITに在籍する聴覚障害学生に対するカウンセリングは、主にCBGS内のカウンセラーが担当するが、心理カウンセリングなど精神的な問題を扱う内容の場合は中央のカウンセリングセンターを紹介することが多いため、こちらで扱う内容は家庭内の問題や人間関係のトラブル、学業上の問題等が中心であるとのことである。このうち、特に学業上の問題については、チューターやその他の情報保障サービスとも大きく関わってくるため、実際にはカウンセラーを中心に、CBGSのスタッフ全体で問題解決にあたることも多いとのお話だった。

図9　Student Life team

この他に、聴覚障害学生同士の結束を強め、個人の持つ力を引き出していく取り組みとして、NTID内に聴覚障害学生が構成する学生生活チーム（Student Life team）が置かれている。ここでは、新入生へのサポート、黒人などマイノリティグループへのサポート、リーダー養成などが行われており、聴覚障害学生が自ら自分の力を高めていくためのサポートがなされているようであった。

ロチェスター工科大学（RIT）と米国立聾工科大学（NTID）学生寮（寄宿舎）の視察

大泉 溥（日本福祉大学障害学生支援センター長）

私はアメリカの大学における聴覚障害学生の実情を視察した際に、大学がどんな支援サービスを提供しているのかという興味とともに、彼らの学生生活がどんなふうになっているのかということにも関心があった。それで、DeCaro教授に「ぜひ学生寮を見学したい」とお願いして、2004年４月16日の午後に、その機会を得ることができた。この学生寮視察は予定されていたものではなく、私が通訳者の協力を得て、いわば芋づる式に実現したものなので、その経過に沿って述べることにする。

Ⅰ．ロチェスター工科大学（RIT）の学生寮

私が通訳者を伴って指示された時刻に所定の場所（学内の一角にある寮舎群のセンター的な建物の入り口で、かなり広いロビー）に行くと、そこにはたくさんの若者たちが集まっていた。受付の人（学生アルバイト）に聞くと、彼らは９月からの新学期にロチェスター工科大学（RIT）に入学することが決まり、学生寮に入るための下見にきた人たちであった（親を同伴した若者もいた）。RITでは１学年は全寮制であり、その後も学生寮を利用している者が少なくないが、高学年になると大学周辺の学生アパートなどに移る者もあるとのことであった。

間もなく学生寮の案内役が現れ、４つのコース（１グループ20名ほど）に別れて、それぞれ別な寮舎へと案内してくれた。案内役は４年生の学生アルバイトで寮の世話係をしている人たちだとのことであった。私のグループを担当してくれた男性の案内役はインドからの留学生であった。

大学の一角、５～６棟の建物がすべて学生寮であることには驚いた（写真１参照）。

案内役の後をついて一つの学生寮に入ると、玄関の脇に舎務室があり、複数の女性職員がパソコンに向かって仕事をしていた。私たちは案内役に従って２台のエレベータに分乗して４階まで行き、寮生たちの居室の並んだ廊下に立ち、説明を聞いた。エレベータのあるロビーを境に左右に防火壁のある生活棟（別なブロック）になっており、それぞれの棟の最初の部屋は学生寮の世話係（学生アルバイト）の部屋であった。その棟の居室は廊下の両側にそれぞれ１０室ほどあり、２人部屋で生活している。そんな、こんなを興味津々で見たり聞いたりしている中に、案内役の引率しているグループからはぐれてしまったので、１階の玄関に戻り待つことにし

た。その際に、私の通訳が舎務室の職員に話しかけると気軽に応じてくれて、学生寮の運営システムについて説明してくれた。とくに印象的だったのは、学生たちの自治寮ではなく、大学が管理運営の責任を持ち、それぞれの棟ごとに世話係（学生アルバイト）を配置して、学生たちの要求に応じた生活の面倒を見ている点であった。

その職員に日本から聴覚障害学生支援について視察に来ており、聴覚学生の寮生活に興味があるというと、「自分の友だちがNTIDの舎務室の職員をしているので紹介してあげる」と言ってくれ、電話をして、見学の了承をとってくれた。

Ⅱ. 米国立聾工科大学（NTID）の学生寮

NTID学生寮（写真２参照）に行き、玄関脇の舎務室で紹介してもらった職員の方から説明を聞いた。寮生の全員が聴覚障害学生だと思っていたのだが、そうではなく、「規則上は半数以上を聴覚障害者にしなければならない」ということになっており、現在は６割ほどが聴覚障害学生で、残りの４割はＲＩＴの学生だが聴覚障害学生と同居することや手話ができることが望ましいことを承知で入居しているそうである。そして、さすがだと思ったのは職員も世話係（学生アルバイト）も、全員が手話通訳のできる人だという点であった。

職員の方が棟の世話係を呼んでくれ、紹介してくれたので名刺を渡して、日本から視察に来たことや寄宿舎に興味があることを話した。すると、「自分のところを見せるから来ないか」と誘ってくれた。そこで、エレベータで８階まで上がり、その世話係（髭面のアルバイト学生）の部屋で、世話係の仕事や寮生の生活について、いろいろと話を聞いた。彼は廊下の壁に貼ってあるポスターなどを示しながら（写真３参照）、サークル活動の支援やイベントの案内などの話をしてくれた。そこでは、ドラッグ（麻薬など）への対応が日常的な生活管理の重要問題だというのにはいささか驚いた。

その世話係の廊下を挟んだ向かい側は学生たちが共同利用する談話室（２部屋分のスペースで20畳ほど）であった。とくに机や椅子もなく、ガランとしており、一角にある水場にはガスコンロはなくやや古くなった電子レンジが１個置いてあるのが印象的だった。これまで何度も火事騒ぎがあり、今では居室では火気厳禁（電気ポットも使用禁止）であり、学生たちは校内にいくつもある食堂（夜遅くまで営業）を利用しているとのことであった。

そこのところに、たまたま隣の部屋の学生が顔を出した。世話係が日本からの見学者だと紹介してくれたことから、この学生の居室を見せてもらうことになった。

棟や居室の構造は上記のRIT学生寮で見たのとほとんど同じであったが、この聴覚障害学生は２人部屋を一人で使用していた。洗面所、シャワー室、トイレは隣部屋と共有の造りで、彼の部屋の場合には世話係の部屋との共有であった。居室はベットと机のスペースを除くとあまりゆとりのないビジネスホテルの部屋の感じであった（写真４参照）。彼はチェコ出身でドイツの高校で学びアメリカに留学しコンピュータの技術を学んでいるのだという。

世話係の人がＡＳＬ（手話）で彼の話すことを英語に通訳してくれて、それを通訳が私に日本語で伝えてくれ、また私の言うことを日本語通訳が英語に翻訳し、それを世話係が手話にして彼に伝えるという形の会話であったが、ずいぶんと楽しい一時となった。生活の場での当事者との交流は支援の専門家による説明とは一味違ったものを感じさせてくれた。

写真１　ＲＩＴの学生寮ゾーンの案内板の前で

写真２　ＮＩＴＤの学生寮全景

写真３　廊下のサークルやイベントのポスター

写真４　居室での聴覚障害の寮生と世話係

PEPNet（Postsecondary Education Program Network）の概要

白澤 麻弓（筑波技術短期大学障害者高等教育センター助手）

Ⅰ. はじめに

アメリカでは、障害者教育法（Individuals with Disabilities Education Act）によって3～21才の障害児・者の教育を受ける権利が保障されており、同時にADA法（Americans with Disabilities Act）によって高等教育機関を含む公的施設における障害者差別が禁止されていることは承知の事実であると思われる。

こうした法的措置を受け、高等教育機関における聴覚障害学生の機会均等を保障するために行われている取り組みが、本稿で紹介するPEPNet（Postsecondary Education Program Network）である。PEPNetとは、長年先進校において培われてきたサポートのノウハウを、全米の各大学・短大全体へ広め、アメリカにおける聴覚障害学生サポートをより充実させることを目的に設立されたネットワークで、米国教育省と特殊教育局の援助により運営されている（須藤, 2001）。

ここでは、1997年に5年契約で開始されてから、現在第2期目の後半に差し掛かかろうとしているPEPNetの組織体制及び活動内容について報告する。

Ⅱ. PEPNetの組織と活動

PEPNetは全米をカバーする高等教育段階における聴覚障害学生支援ネットワークであるが、もともとは1996年米国教育省が全米を4つの地域に分け、それぞれに各地域の基幹たりうるセンターを設けて、アウトリーチプログラムを展開することを決定したことから広がりを見せたプロジェクトである。教育省はそれぞれの地域に設置するセンターの候補を募ったが、この結果、長年充実したサポートサービスを提供してきた各大学がこの座を射止め、表1に示すような各組織が形成されることになった。設立当初、組織の活動はぞれぞれ独自に展開することになっていたが、各地域が抱える問題の中には大部分共通する課題も含まれていたため、それらを共同で解決するために互いに協力し合う組織として誕生したのがPEPNet（図１）であるとのことであった。すなわち、米国教育省の提案に端を発した予期せぬ展開の一つであったわけだが、今日の発展の状況を見る限り、非常にすばらしい「誤算」となったといえよう。

表１　４つの地域センター

	中西部	西部	北東部	南部
地域センター	MCPO	WROCC	NETAC	PEC
正式名称	Midwest Center for Postsecondary Outreach	Western Region The Western Region Outreach Center and Consortia	Northeast Technical Assistance Center	Postsecondary Education Consortium
拠点校	セントポール工科大学	カリフォルニア州立大学ノースリッジ校	ロチェスター工科大学	テネシー大学
体制	拠点校の他に3つのサイトを設置	拠点校の他に2つのサイトを設置	各州ごとにサイトを設置	各州ごとにサイトを設置
管轄地域	アイオワ、イリノイ、インディアナ、カンザス、オハイオ、ミシガン、ミネソタ、ミズーリ、ネブラスカ、ノースダコタ、サウスダコタ、ウイスコンシン	アラスカ、アメリカ領サモア地域、アリゾナ、カリフォルニア、コロラド、グアム、ハワイ、アイダホ、モンタナ、ネバダ、ニューメキシコ、北マリアナ諸島、オレゴン、ユタ、ワシントン、ワイオミング	コネチカット、デラウェア、コロンビア特別区、メイン、メリーランド、マサチューセッツ、ニューハンプシャー、ニュージャージー、ニューヨーク、ペンシルバニア、プエルトリコ、ロードアイランド、バーモント	アラバマ、アーカンソー、フロリダ、ジョージア、ケンタッキー、ルイジアナ、ミシシッピ、ノースカロライナ、オクラホマ、サウスカロライナ、テネシー、テキサス、バージニア、バージン群島、ウエストバージニア

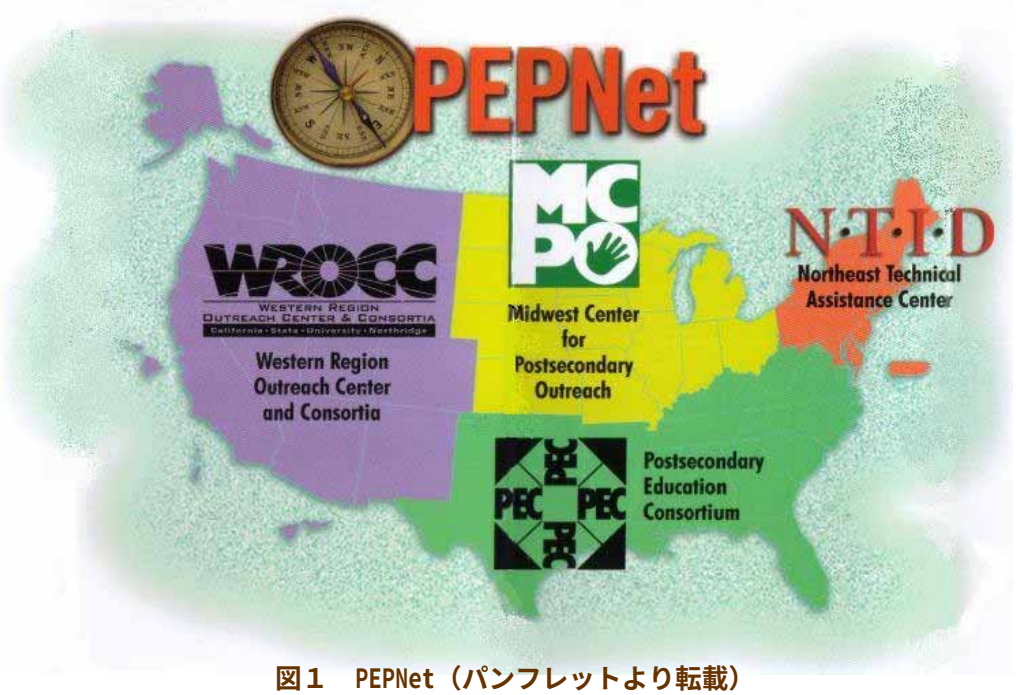


図１　PEPNet（パンフレットより転載）

4地域が共同で行っているプロジェクトにはいくつか大きなものがあるが、そのひとつがPEPNetリソースセンター（図2、図３；WROCCが中心になって運営しているもので、CSUNのNCOD内に設置されている）である。これは、PEPNet内の各地域センターやサイトによって作成された資料が一元的に管理されているライブラリーであり、これを見るだけでもPEPNetという形で全米をネットワークで結んだ価値が大きいことがうかがえる。また、PEPNetによって運営されている聴覚障害学生サービスにかかわるコーディネーターのMLでは、サービス提供にあたって相談したいことがらをたずねると、数時間の間に全米各地から何件もの回答が返ってくるような充実ぶりで、現場のコーディネーターにとっても非常に信頼できるネットワークになっているとのことであった。その他、Websiteの作成やサテライトシステムを利用した各種トレーニングの開催、ニーズアセスメントの実施、養成カリキュラムの開発等、聴覚障害学生サポートをより充実させるために必要な研究開発を、お互いに分担して重点的に行うなど、効率的に活動を展開している点で学ぶべき所は多い。

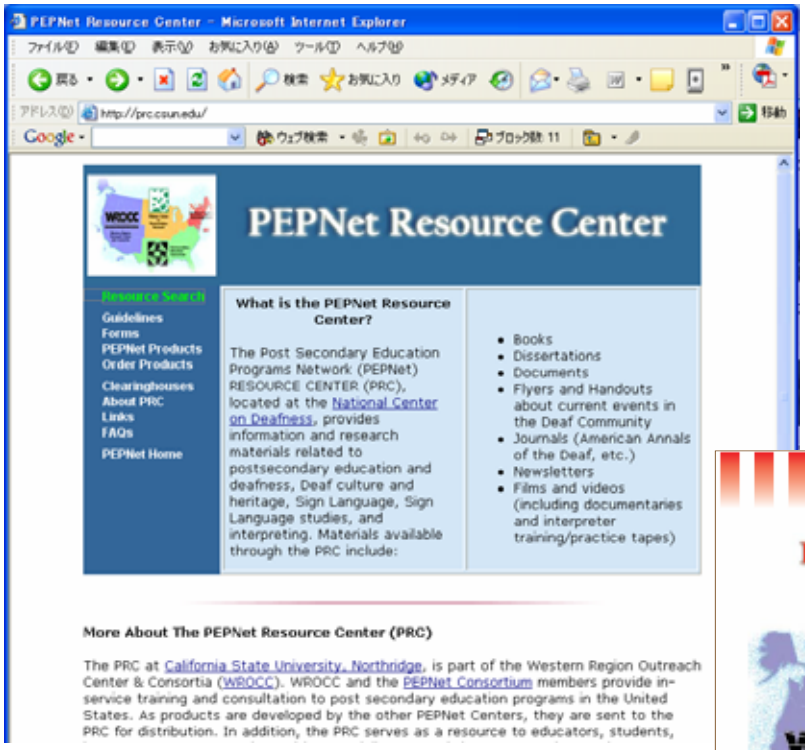


図2　PEPNetリソースセンターのホームページ
（http://prc.csun.edu/）
各地域センターによって作成された聴覚障害学生支援関係のさまざまな資料が一括管理されており、その数は3500種類以上。無料でダウンロード可能なものも多い。

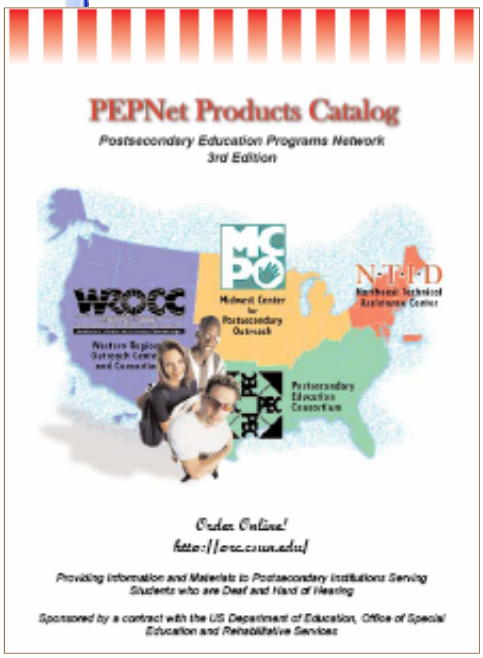


図3　PEPNetリソースセンターのカタログ
リソースセンターを通して手に入る資料のリスト。無料で配布している。

また、2年に1度開催される全米大会についても、各地域センターの持ち回りで行われていた。今回視察した大会は、北東部を統括するNETACの主催で行われていたが、全米各地から高等教育機関で聴覚障害学生サポートサービスを担っているサービスコーディネーターや通訳者、カウンセラー、聴覚障害学生、ろう教育関係者、聴覚障害児を持つ両親など、数多くの関係者が訪れ、8会場で50件を超えるセッションが繰り広げられる様子はまさに圧巻であった。

図4　PEPNet全米大会の様子
中央が講演者、舞台両端に立っているのが手話通訳者。スクリーンには講演者の映像と速記タイピストによる字幕が表示されている。

III. 地域センターの活動

全米全域で行われているPEPNetの活動とは別に、大学の問い合わせに対して対応するといった日々の活動は、各地域センターおよびこのサイトによってそれぞれ独自に行われている。例えば、NTID内に地域センターが設置されているNETACでは、各州ごとに中核になりうる大学やリハビリテーションセンター内にNETACサイトと呼ばれるサービス拠点が置かれ、ここで働くサイトコーディネーターが、州内のサポートサービスに関する相談に応じたり、大学教職員やノートテイカー、手話通訳者、聴覚障害学生等を対象としたワークショップを開催するなどのサービスを提供している（表2）。こうした地域内の組織体制は４つの地域センターにすべてまかされる形となっているため、地域によってはNETACのように州に分けてサービスを提供するのではなく、広域をカバーする大きな拠点センターを複数構え、そこが地域全体をカバーするなどの方法をとっているところもあるようである。

また、PEPNet全体の活動をはじめ地域センターの運営や各サイトの活動にかかる費用は、すべて4つの地域センターに投じられた連邦政府からの補助金によって成り立っているとのことで、その総額は各センター年間100万ドル（約1億2000万円）、全体で400万ドル（約4億8000万円）にも上るとのことであった。

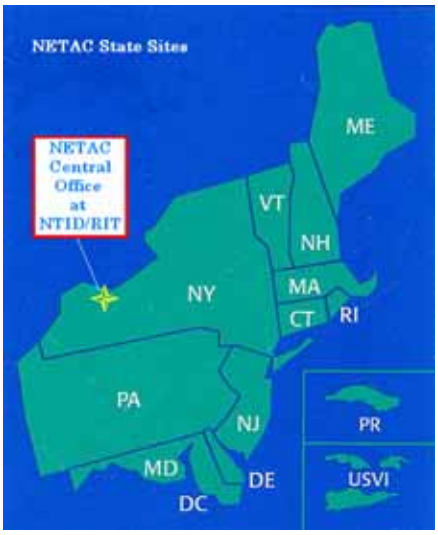
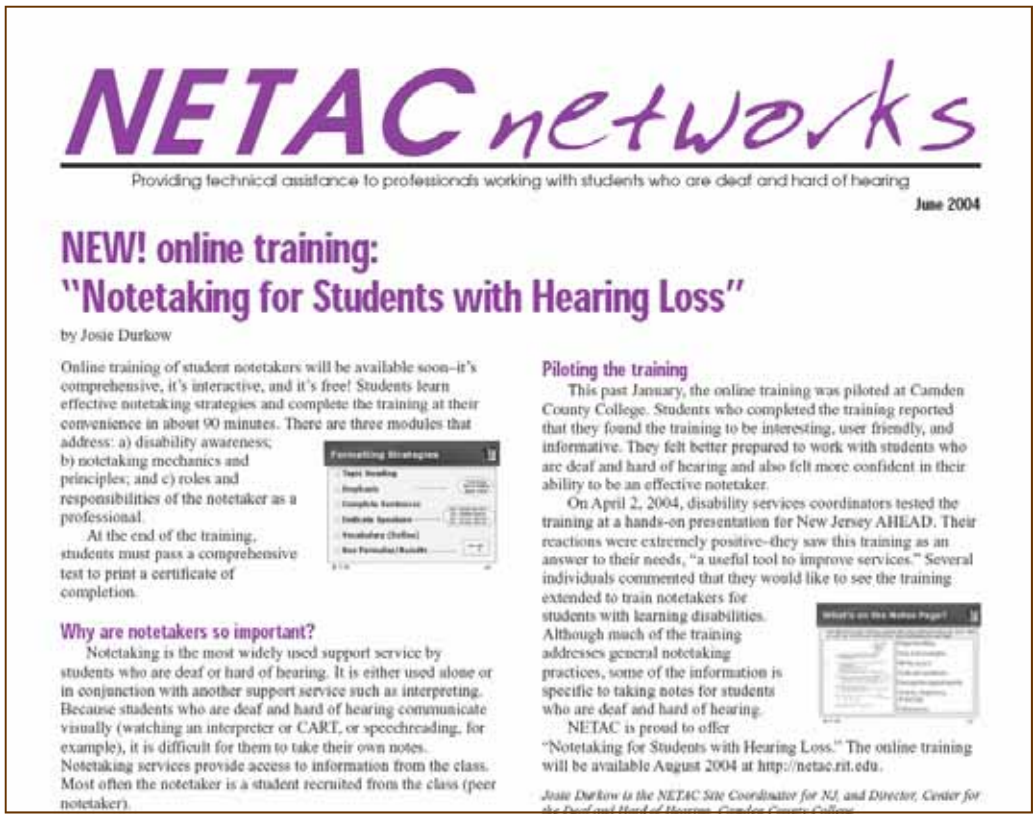


図5　NETACセンターとサービス提供領域

NY州のロチェスターにあるNTIDに地域センターがおかれ、各州ごとに設けられたサイトとの共同で全体のサービス向上を目指している。

表2　NETACによって提供されているサービスの内容

サービス内容	概要
コンサルティング	聴覚障害学生サポート体制を整えようとする大学に対するアセスメント、情報提供、アドバイス、通訳者の紹介、聴覚障害学生へのカウンセリング等の実施。
各種相談への対応	通訳サービスや聴覚障害学生サポートに関する問い合わせに対する情報
ワークショップの開催	通訳者養成のためのワークショップや聴覚障害学生のためのトランジッションプログラムの開催、教職員のための障害理解FD、サービスコーディネーターを対象とした養成プログラムの実施など。（年間約200
プログラムの開発・提供	ノートテイカーやC-Printオペレーター養成のためのオンライントレーニングプログラムの開発。聴覚障害学生のためのトランジッションプログラムの開発。
教材、資料の作成・提供	Tipシートをはじめとする教職員啓発のための資料作成、オンラインによる配布。聴覚障害学生のエンパワメントためのビデオ教材の作成など。
サイトコーディネーター、サービス	ニュースレターの発行・メーリングリストの運営等を通した情報提供。



NETAC networks

Providing technical assistance to professionals working with students who are deaf and hard of hearing

June 2004

NEW! online training:
"Notetaking for Students with Hearing Loss"

by Josie Durkow

Online training of student notetakers will be available soon–it's comprehensive, it's interactive, and it's free! Students learn effective notetaking strategies and complete the training at their convenience in about 90 minutes. There are three modules that address: a) disability awareness; b) notetaking mechanics and principles; and c) roles and responsibilities of the notetaker as a professional.

At the end of the training, students must pass a comprehensive test to print a certificate of completion.

Why are notetakers so important?

Notetaking is the most widely used support service by students who are deaf or hard of hearing. It is either used alone or in conjunction with another support service such as interpreting. Because students who are deaf and hard of hearing communicate visually (watching an interpreter or CART, or speechreading, for example), it is difficult for them to take their own notes. Notetaking services provide access to information from the class. Most often the notetaker is a student recruited from the class (peer notetaker).

Piloting the training

This past January, the online training was piloted at Camden County College. Students who completed the training reported that they found the training to be interesting, user friendly, and informative. They felt better prepared to work with students who are deaf and hard of hearing and also felt more confident in their ability to be an effective notetaker.

On April 2, 2004, disability services coordinators tested the training at a hands-on presentation for New Jersey AHEAD. Their reactions were extremely positive–they saw this training as an answer to their needs, "a useful tool to improve services." Several individuals commented that they would like to see the training extended to train notetakers for students with learning disabilities. Although much of the training addresses general notetaking practices, some of the information is specific to taking notes for students who are deaf and hard of hearing.

NETAC is proud to offer "Notetaking for Students with Hearing Loss." The online training will be available August 2004 at http://netac.rit.edu.

Josie Durkow is the NETAC Site Coordinator for NJ, and Director, Center for the Deaf and Hard of Hearing, Camden County College.

図5　NITACのニュースレター
http://www.netac.rit.edu/publication/newsletter/
各種ワークショップの案内等が掲載されており、活動の様子がよくわかる。上記Webページよりダウンロード可能。

〈引用文献〉

1）NTID（2003）FY2002 Annual report. NTID.

2）須藤正彦・大沼直紀・小林正幸・荒木勉・橋本公克・松藤みどり(2001)　アメリカの聴覚障害者の高等教育機関における教育組織と教育内容・方法に関する比較研究. 筑波技術短期大学　テクノレポート, 8.

3）NETAC（2004）Northeast Technical Assistance Center. NETAC.

4）NETAC　http://www.netac.rit.edu/index.html

5）NETAC（2004）Northeast Technical Assistance Center Annual report. NETAC

6）PEPNet（2004）Post Secondary Education Programs Network. PEPNet.

7）PEPNet　http://www.pepnet.org/

聴覚障害学生の高等教育支援におけるエンパワーメント

松崎 丈（宮城県・仙台市聴覚障害学生情報保障支援センター代表）

Ⅰ. はじめに

近年、アメリカでは、聴覚障害学生は、障害者差別禁止法の恩恵を受けながら職業的自立ができるよう高度な知識や技術を習得するだけではなく、当事者として高等教育や社会の支援サービスをよりよく変えていくように主導する権利と責任をもち、行動に移すことも必要であるという考えが台頭してきている。この考えは、エンパワーメントという概念に基づいていると思われる。エンパワーメントとは、「当事者は、専門家の援助を前提条件とするのではなく、自ら問題を解決し、自分たちに影響を及ぼす事柄を自分自身でコントロールし、実践していくこと」である。

ここでいう当事者とは、広義的には、「サービスをしてもらう受動的な立場と、従来のサービスに対してより有効なアイデアや代替策を提供できる能動的な立場の両方を持った主体」とされる。この場合、聴覚障害学生だけでなく、聴覚障害学生に対する教育的支援を行う立場にある教職員も、聴覚障害学生に対するサービスを行うための養成や研修などのサービスを受ける立場になり、その意味で当事者ということになる。アメリカでは、当事者である聴覚障害学生および教職員に対してエンパワーメントに関するさまざまな取り組みを展開している。ここでは、カリフォルニア州立大学ノースリッジ校および国立聾工科大学における聴覚障害学生を対象にしたエンパワーメントの取り組みを中心に紹介する。

Ⅱ. カリフォルニア州立大学ノースリッジ校(CSUN)における3Rプロジェクト

カリフォルニア州立大学ノースリッジ校(CSUN) にある聾者のための支援センター(NCOD) は、3Rプロジェクト (3R: Roles、Rights and Responsibilities for Deaf and Hard of Hearing Students) を開始した。アメリカ合衆国教育省の高等教育局から3ヵ年計画で助成を受けて進めている。当プロジェクトの目的は、聴覚障害学生が、高等教育においてピア学生、教職員、管理職に対して、より適切かつ妥当な支援サービスを実現させていくために、権利擁護運動のリーダーとして機能できるように養成することにある。その人材育成は、聴覚障害学生が、卒業後、一般地域や仕事場でも適用し、実践していくことも視野に入れている。

図1　3Rロゴ (http://3r.csun.edu/)

聴覚障害学生の養成方法については、2つの段階が用意されている。まず第1段階では、各州から募集した50名の聴覚障害学生が1ヶ月間オンライントレーニングを受ける。そのトレーニングでは、チャットやeメールなどを活用して、自己擁護、批判的思考、問題解決能力、プレゼンテーション及び書記言語力などで構成された10のモジュール(MODULE) で学ぶ。各々のモジュールの概要を表1に示す。

図2　3Rプロジェクトに参加した学生たち
（Webページより転載）

表1　モジュールの概要

モジュール1: コースの目的／3Rの課題 Course Objectives / 3R Assignments
コースの目的及び以下のモジュールの概要を説明する。

モジュール2: 精神力の向上 Exercising Your Mental Muscle
自己評価や自分の長所や短所を確認する。そして自分の欠点を改善する方法を学ぶ。

モジュール3: 法律の検証 Backing It Up (The Law)
自分を守る法律や規則とは何なのかを理解する。またその法律との関わりの中で、自分自身の権利や役割を知る責任をもつこと。

モジュール4: サポート資源の選定 Tapping Your Resources (Support Services)
サポートサービスを理解し、利用できるサービスや設備を検討する。サービスを確認し、要求することが自分自身の責任となぜどのように関わるのかを認識する。

モジュール5: 批判的思考 Critical Thinking
問題解決場面を設定し、そこで自分自身が自己擁護できるように批判的な思考をどのように活用するのかを学ぶ。

モジュール6: 勝利をえるための擁護 Advocate To Win
自己擁護するための様々な手法を導入し、状況を見極めていつどのように擁護するかを学ぶ。

モジュール7: メッセージを伝える Getting The Message Across (Presentation)
様々なプレゼンテーションと、それによる利益を指導する。効果的なプレゼンテーションを行うための計画作りも学ぶ。

モジュール8: 効果的な書き方 Do It The Write Way (Effective Writing)
広告のように効果的なレター、e-mailなどの書き方を提供する。

モジュール9: 節度ある対応 Keeping Your Cool (Look Like A Pro)
様々な状況 (ミーティング、食事、通信など) で社会的にかつ専門家としてふるまう方法を学ぶ。

モジュール10: テクノロジー Wire and Wireless (Technology)
学生にとって有益な技術 (Webカメラを利用した会議など) を紹介する。

モジュールの具体的な教授内容を説明しよう。例えば、モジュール2では、精神力の向上、つまりメンタルトレーニングを行う。まず聴覚障害学生に、Me(私)、Family/Culture(家族、親戚など)、 Friends/Peers(クラスメイト、チームメイトなど)、 Big World(年齢、外見、ライススタイルなどの共通点を持つサブグループ)の4つの相で構成されるダイアグラムをみせて、自分と他の3つの相との間にどのような関係があるのか、その関係の中で自分はどのような役割をもっているのか、自分から3つの相に対してどのように影響しているのかを考え、自由記述させる。そして、次のレクチャーで前述のダイアグラムをみて書いた資料と絡めながら、自己概念、自己信頼感及び自己価値について講義を行う。最後のレクチャーでは、これまでのレクチャーを踏まえ、自分自身をコントロールするためのセルフトークについて学ぶ。

第1段階で全ての12モジュールを終了すると、第2段階に進む。この段階では、2、3日間の短期集中型の実践トレーニングが行われる。そこでは、第1段階で学んだことを基盤として支援プランを設計したり、メインストリームの高等教育機関の聴覚障害学生、教職員及び管理職にプレゼンテーションが行われる。

以上のように3Rプロジェクトの実施は、参加した聴覚障害学生たちから高い評価が得られており、彼らにとって有意義なエンパワーメント養成の場になっていると言える。

なお、この3Rプロジェクトのホームページでは、聴覚障害学生のためのサポート資源 (Resource) として聴覚障害に関わる情報が12項目紹介されている(表2)。例えば、9のデフ組織では、アメリカ盲ろう者協会、ASL教師協会、全米ろう連盟、全米ろう黒人擁護協会などの19組織が記載されており、そのリストの下に、上記の団体をWeb検索すれば閲覧可能という旨の説明文がある。

(URL　http://3r.csun.edu/)

表2　Resource list

1. Deaf Culture (ろう文化)
2. Deaf Artist (ろうのアーティスト)
3. ASL (アメリカ手話)
4. Deaf Biographies (ろうの伝記)
5. Deaf Education (ろう教育)
6. Deaf Entertainment (ろう演劇)
7. Deaf History (ろう者の歴史)
8. Laws & Advocate (法律と擁護)
9. Deaf Organizations (デフ組織)
10. Deaf Publications (刊行物)
11. Religion (宗教)
12. Deaf Sports (デフスポーツ)

III. 国立聾工科大学（NTID）における取り組み

1.学生生活チーム（Student Life team; SLT）

SLTは、NTIDの学生業務に関する下部組織のひとつである。SLTの理念は、聴覚障害学生のために、聴覚障害学生とともにサポートおよびアドボカシー※を行い、これらがすぐれた成功をおさめるものになることを目指すことにある。なおかつ、その活動を聴覚障害学生にも参画するように要求し、ともに活動していくというねらいもある。この理念は、聴覚障害学生にとって、大学における学問および社会的な生活の質が有意義でポジティブなものになるように援助したいという考えに基づいている。ちなみに、SLTは、合衆国政府からNTIDに支出された助成金を受けて運営しており、SLTスタッフは、聴覚障害学生のみの支援に取り組むためにNTIDの準学生部長が雇用したメンバーで構成されている。（※アドボカシーとは、1）人間としての権利を認め、2)その権利を社会に伝える努力をし、3)それにより社会を変える、という一連の運動である。）

図3　SLTのロゴ

図4　SLTマイノリティグループスタッフ
（Webより転載）

SLTは、あらゆる背景や経験（生育、家族、言語、民族など）を持つ聴覚障害学生と、スタッフに対して次のように養成・開発を行っている。

まず、聴覚障害学生に対するサポートについては、新入生へのサポート、黒人など有色人種マイノリティグループに対するサポート、リーダー養成、女性を対象にしたサポートなどの７つの支援プログラムが行われている。そのうち新入生へのサポートについて紹介しよう。新入生へのサポートでは２つのプログラムが行われている。NTIDに入学した聴覚障害学生を中心に支援するSVP（Summer Vestibule Program）と、RITの学士課程に入学した聴覚障害学生を対象にしたSOAR（Student Orientation Assessment and Registration)である。SVPでは、聴覚障害学生が職業的自立への自覚、自己決定過程、学生生活への適応および学究的な技術と能力の習得を進めていけるように援助またはそのための準備を行う。SVPの実施期間中、聴覚障害学生は、NTIDおよびRITの他学部のプログラムについて学び、それに対して教職員が学生たちのスキル、能力およびモチベーションを評価する。このようなプログラムを通して聴覚障害学生

は、自分自身にあった適切なプログラム（具体的な説明はないが、おそらく他の支援プログラムと思われる）を選択するうえで助けとなる情報を集め、自分自身の今後の学生生活プランを設計することができるという。一方、SOARでは、NTIDにおけるさまざまな教育支援サービスをどのように援用できるかを提供したり、RITの組織やサービスを説明したり、他の新入生、自分の所属する科の科長や教員との面談を用意するなどの内容が行われる。

次に、スタッフに対する養成・開発である。SLTスタッフは、支援対象として聴覚障害学生だけでなく学生と関わる教職員も加えているため、教職員に対してもきちんと支援ができるように、いつも聴覚障害学生の実態を把握しておくこと、その上で適時に適切なサポートプログラムを開発し、かつ有機的な支援を行う必要がある。そこでSLTスタッフは、日常的に聴覚障害学生と綿密なコミュニケーションをとったり、学生の間で生じている現実的な問題について調査や文献研究を行うなどの取り組みをしている。それは、結果的にスタッフ自身にとって自己養成・開発につながっている。教職員への支援については、チューターを対象とした支援に重きをおいているようである。(チューターの役割については、「ロチェスター工科大学（ＲＩＴ）における聴覚障害学生サポートサービスの概要」における「３．チュータリングサービス」を参照。）その理由は、チューターは、教育環境において教職員と聴覚障害学生との相互関係を調整する役割をもつため、多様な背景・経験を持つ聴覚障害学生の実態を理解し、かつそのニーズに応じた支援環境を整備・用意する技術が要求されるからである。したがって、チューターがその技術や知識の習得および実践をすることを後方支援することが、SLTスタッフにとって重要な役割となるわけである。

以上から、SLTは、聴覚障害学生およびチューターを中心とした教職員に対する養成・開発を行っており、そのような取り組みがNTIDおよびRITにおける高等教育と支援サービスの有効性を維持・向上させるように後方から支援・促進させているといえるだろう。

（URL　http://www.rit.edu/~sltwww/2004ay/index.php3?flash=true　）

2.クラスアクト（Class Act）

図5
クラスアクトのロゴ

クラスアクトは、教員を対象としたエンパワーメントについて取り組んでいる。クラスアクトのねらいは、現行の教育実践が、聴覚障害学生も参加できることを重視した実践へ改善されるように援助することである。具体的には、ウェブサイトを活用して聴覚障害学生に教授する上で有効なストラテジーなどを教員に提供することによって、教員自身に、自分のどのような実践がろう・難聴の学生の参加を促進・抑圧しているのかを認識させ、教員の内省によって改善を促進させることを意図している。

このウェブサイトには、聴覚障害学生にとって参加することを可能にするインクルージョン環境を整備するために方策および留意点が豊富に蓄積されている。そのうち教員が自身の実践に対して具体的な方策を紹介しているもので、「チャレンジ／ストラテジー（Challenges/Strategies）」というコンテンツがある。これは、教員が聴覚障害学生とのインタラクションにおけるあらゆる局面に対してチャレンジする上で有効なストラテジー（方略）を提供することを目的としている。教授、コミュニケーション、サポートサービス、環境の４つのカテゴリで構成されており、各カテゴリには７つ以上のトピックが余すところなく紹介されている。

そのうち教授カテゴリにおけるトピックでは、＜オリエンテーション（導入）＞、＜講義第１日目＞、＜ペース（速度）＞、＜視覚教材＞、＜視覚的注意＞、＜呼び方＞、＜試験＞など12項目がきめ細かに呈示されている。また、各項目に聴覚障害学生および経験者の教員のコメントを収録した動画ファイル(もちろん字幕あり)と、有効なストラテジーを列挙した印刷用ファイルが挿入されている。これは、他３つのカテゴリにも同じく含められている。例えば、＜講義第１日目＞にある動画ファイルでは、聴覚障害学生がアメリカ手話で次のような話をしている様子を見ることができる。「私は、事前に講義関係の文献を与えられてもそれだけでは十分理解することはできない。むしろ私が希望するのはこうである。まず、講義でパワーポイントやスライドなどの視覚教材を使って説明を受けること、かつパワーポイントなどの印刷物も配布してもらうことだ。そして、講義の後ノートテイクを入手し、これを印刷物や私が講義でメモした内容とあわせて読み直し、かつ講義の内容を思い出しながら整理する。それにより講義の内容を十分に理解することが可能となる。」。

教員は、このような形で聴覚障害学生本人の語りをみることによって聴覚障害学生のニーズを具体的に把握することができ、さらにそのニーズに対応する有効なストラテジーを学んで自分の講義スタイルを調整・改善することができる。また、有効なストラテジーなどの資料がウェブサイトを媒体として提供されていることから、教員は、いつでも、もしくは何らかの問題が生じたときに、そのウェブサイトにアクセスし、ある特定の状況に応じた有効なストラテジーや情報を探索・獲得できると思われる。

図6　学生からのメッセージビデオ
聴覚障害学生が、授業を行う教員に対して望んでいる内容を語っている。Webサイトより視聴可。
http://www.rit.edu/~classact/side/studentperspectives.html

なぜ、こんなにコンテンツが抱負かつ体系的に充実しているのだろう。これは、クラスアクトというウェブサイトを作り上げるまでの経緯と深く関わっていると思われる。このウェブサイトは、アメリカ教育省から、２つの助成金（Fund for the Improvement of Postsecondary Education: FIPSE, Demonstration Projects to Ensure Students with Disabilities Receive a Quality Higher Education）を受けて発展したが、その前は、ロチェスター工科大学の学務担当副総長による助成を受けてロチェスター工科大学理学部とNTIDが共同して開発していた。この共同開発に関して特筆すべき特色は、理学部およびNTIDの教員やスタッフだけでなく、学生も加わって日常行われる相互交渉についてのワークショップや、講義の観察と評価および調査研究をともに行っていた点である。これは、聴覚障害学生のインクルージョンにおける問題点を解決する方略や留意点に関してきちんと基礎資料を収集する必要があったからであろう。いわば、クラスアクトは、まさに学生、教員およびスタッフの三者が共同作業を行うなかで何らかの共通認識を相互理解の下で築いてきた結果として蓄積され、体系化していった膨大なデータベースといえる。なお、このプロジェクトは、ウェブサイト上にはない新たなストラテジーや情報があれば、いつでもその情報提供を受け付け、更新していくように現在も活動中である。

（URL　http://www.rit.edu/~classact/　）

写真左　PEPNet全米大会ポスターセッションおよび機器展示の様子
聴覚障害学生支援に利用可能な機器や教材、資料などあらゆるリソースが手に入る。

写真右　PEPNet全米大会分科会の様子
高等教育場面における通訳技術の検討や聴覚障害学生の心理的サポート、最新技術の紹介、教員へのFDなど多様な報告がなされていた。

資料編

アメリカにおける手話通訳事情 40
アメリカの障害者差別禁止法 56
アメリカのろう教育システム 59
PEN-Internationalについて 62

アメリカにおける手話通訳事情

白澤 麻弓（筑波技術短期大学障害者高等教育センター助手）

アメリカにおける聴覚障害学生サポートについて討議する際に押さえておくべき背景知識として、アメリカにおける手話通訳事情があげられよう。ADA法により高等教育機関をはじめとする公的な機関では、聴覚障害者の要望に応じて手話通訳者を配置しなければならないと規定されている点が、本稿ではこうした通訳制度を支える手話通訳の資格認定の方法や養成、身分保障等について概観することとする。

Ⅰ. 手話通訳資格

我が国で発行されている手話通訳の資格には、厚生労働大臣の公認資格である「手話通訳士」資格と、各県が発行する「手話通訳者」資格、市が発行する「手話奉仕員」資格の大きく分けて3つが存在する。このうち、手話通訳士資格については、年に1回東京と大阪の2会場（筆記試験は東京、大阪、熊本の3会場）で統一試験が実施される全国共通資格となっているが、県・市レベルの資格については、現在一部統一の動きは見られるものの、現時点では地域によって名称や難易度が異なる。そのため、手話通訳の技術レベルを論じる上で共通の基準として用いることができる資格は、実質的には手話通訳士資格のみとなっている。

これに対し、アメリカでは全米の統一基準として個人の持っている通訳技術のレベルや専門分野におけるさまざまな技量等を細かく判定し、認定を行っているため、一つの機関が複数の通訳資格を発行している状況にある。このうち最も知名度が高く、ちょうど日本における手話通訳士資格のように、一般的に周知されているのが「全米手話通訳者登録協会（The Registry of Interpreter for the Deaf; RID）」による資格である。一方、全米共通の認定資格として、アメリカろうあ連盟（The National Association of the Deaf; NAD）が発行するものがあり、こちらは通訳資格というより技能レベルの評価に近い性格を有している。その他、特にインテグレーションが盛んな州では教育通訳の資格を発行するなど、州や通訳養成校などで独自の資格が多数発行されているが、本稿では、先に述べたRIDとNADの２大機関による資格について、内容や取得方法等を概観し、現在アメリカの通訳者間で大きな議論を呼んでいるこれら2大資格の統一の動きについて紹介することとする。

1.RIDによる手話通訳資格

1972年から世界に先駆けて発行されている通訳資格で、毎年1000人以上の通訳者が試験に志願している。興味深いのは資格の内容で、「手話通訳士」資格一つ

のみを発行している我が国とは異なり、RIDで発行されている資格には複数種のものがあり、過去に発行された資格も含めると、その数は約20種類にもなる(資料１参照)。しかもその違いはレベルのみでなく、使用手話や通訳の方向、通訳場面等、各種通訳状況に特化した資格も多く検討されてきており大変興味深い。また、手話通訳というと健聴者の仕事というイメージが強いが、RIDではろう者による通訳も資格化しており、取得者は盲ろう者に対する通訳場面やホームサインを使用するろう者と通常の通訳者の間のリレー通訳場面等で数多く活躍している。

表１には2003年に発行された資格のうち、主なものを示したが、この他にも口話通訳者やろう通訳者資格等全体で５～６種類の資格が発行されているようであった。志願者数や合格状況は表2の通りである。合格率51%という数字は、例年合格率が8～15%にとどまっている手話通訳士試験に比較してかなり高いようにみうけられるが、これは難易度の低さというよりむしろ、次項で述べるとおり志願者の受けてきた養成のレベルの高さによるものであると推察される。

表1　RIDで発行されている手話通訳資格の例 (RID, 2004)

CI (Certificate of Interpretation)	ASL通訳の資格で、ASLと音声英語間の読み取り通訳及び聞き取り通訳の両方において十分な技術を有する者に与えられる。
CT (Certificate of Transliteration)	英語対応手話通訳の資格で、英語対応手話と音声英語間の読み取り通訳及び聞き取り通訳の両方において十分な技術を有する者に与えられる。
SC:L (Specialist Certificate: Legal)	法廷通訳の資格で、通常の通訳資格の上位に位置づけられている。法律に関する知識を持ち、法制度やそこで用いられる専門用語を十分習熟している通訳者に与えられる。

※上記CIとCTの二つの資格を取得した場合、CI/CT　(Certificate of Interpretation and Certificate of Transliteration) と記載され、様々な通訳場面に対応できる力があるとみなされる。

表2　試験志願者数／合格者数 (2002年)

	志願者数	合格者数	不合格者数	合格率
筆記試験	1367	863	504	63%
実技試験	1188	610	578	51%

※表の数字はRIDが2002年度に発行しているすべての資格試験の合計（RID, 2004）

1）試験実施方法

次に実際の資格試験の実施方法について説明する。資格試験は、RIDの規定に基づき各州の支部がそれぞれ独自に実施されているが、受験者の回答はすべて本部に郵送され、採点や審査は本部で一括して行われることになっている。いずれの資格も1次試験（筆記）と2次試験（実技）の2段階に分かれており、1次試験合格者のみが2次試験を受けることができる。図１には、2000年に実施されたCI及びCT試験の内容をまとめた。比較のため、我が国で実施されている手話通訳士試験の概要を図2に掲載したが、話される内容や話者について事前にまったく情報が得られない我が国の試験方法と比べて、RIDの試験の方がより実際的で現場の通訳に即した形態となっているように見受けられる。

＜1次試験（筆記）＞
実施回数：年に2回（6月、12月の第1日曜日）
有効期限：5年
試験分野：

1.General Socio-Cultural Systems（社会、文化）	コミュニケーションのタイプ、文化とコミュニティの違い、マイノリティ文化の特徴、異文化理解など
2.Language/Language Use（言語・言語使用）	英語（構造的特徴、社会言語学的側面）、アメリカ手話（構造的特徴、社会言語学的側面、言語使用に関する社会言語学的側面、手話及び音声言語の特徴、非言語コミュニケーション、言語使用における異文化相互作用の影響など）
3.Socio-Political Context Interpreting（通訳に関する社会的、政治的側面）	手話通訳と対応手話通訳の違い、文化的葛藤、デフコミュニティにおける対応手話の意味、ろう文化における英語の位置づけなど
4.Interpreting（通訳）	通訳理論とその応用、通訳モデル、通訳の認知プロセス、ASL/英語力の低い対象者への通訳、チーム通訳、同時通訳、逐次通訳、通訳プロセスに作用する要因、話者交代の技術、誤訳への対応など
5.Professional Issues（専門知識）	ADA法、リハビリテーション法セクション504、倫理要綱、通訳資格、手話通訳

図1-1　CI、CT試験の概要

＜2次試験（実技）＞

実施回数：

試験内容：聞き取り通訳、読み取り通訳、会話場面での通訳

<table>
<tr><td>ウォーミングアップ</td><td>6本のビデオテープが用意されており、内容を見てテストに備えることができる。テープの内容は「読み取り通訳」、「会話場面」、「聞き取り通訳」の3つの試験問題の例題が収録されており、異なるトピックで各2本ずつ用意されている。この中では、実際の試験問題と同一の同じ話し手が、手話または英語で話をしているため、実際の問題の雰囲気や話し手の特徴を把握することが可能になっている。さらに、ビデオテープ中の始めには話し手が実際の試験問題内でどのようなトピックについて話すかを説明している部分あり、受験者はここから自分が試験として受けたいトピックを選択することができる。</td></tr>
<tr><td>試験</td><td>受験者の回答はいずれもビデオテープによって録画される。試験開始後でも騒音やノイズ等受験環境が悪い場合にはテープを止めて試験官に申し出ることができる。
<table>
<tr><td>聞き取り通訳</td><td>英語を聞いてCIの場合はASLに、CTの場合は対応手話に同時通訳を行う。</td></tr>
<tr><td>読み取り通訳</td><td>手話を見て英語への同時通訳を行う。</td></tr>
<tr><td>会話場面通訳</td><td>聴者とろう者の会話場面を見て、英語を手話に、手話を英語に通訳する。正確な通訳のために、会話中には十分な間がおかれている。</td></tr>
</table></td></tr>
<tr><td>評価者</td><td>聴者、ろう者、資格を有する通訳者の3名が、それぞれ音声英語、手話技能、手話通訳技能を評定し、総合点で判定を行う。</td></tr>
<tr><td>評価の観点</td><td>音韻（Sign Parameters）、流暢さ（Flow）、意味の等価性（Message Equivalence）、目標言語の適切な使用（Target Language）、表情（Affect）、語彙の選択（Vocabulary Choice）等の13項目のうち、聞き取り通訳は7項目、読み取り通訳は6項目、会話通訳は13項目すべてついてそれぞれ5段階評価で評定を行う。（これらの評価項目は、1987年の全米手話通訳者研究集会で決定されたものである）</td></tr>
</table>

図1-2 CI、CT試験の概要

＜1次試験（筆記）＞

実施回数：年に1回（3会場）

有効期限：3年

試験分野：

1．障害者福祉の基礎知識	障害者福祉の理念等の動向、障害の概念と障害者の実態、障害者福祉施策の現状
2．聴覚障害者に関する基礎知識	聴覚障害の基礎知識、聴覚障害の福祉と運動、聴覚障害者の自立と社会参加
3．手話通訳のあり方	手話通訳者の役割、手話通訳の理論、手話通訳の実際、手話通訳者としての一般教養
4．国語	発音の仕方、音の区別、アクセント、単語、文法、文字、表現法、文章読解
5．手話の基礎知識	手話の知識、手話の基本的語句の理解、手話の表現の理解

＜2次試験（実技）＞

実施回数：年に1回（2会場）

試験内容：聞き取り通訳、読み取り通訳（口頭）、読み取り通訳（筆記）の3種類

試験	ビデオデッキ、カセットデッキ等は試験官が操作し、中断は認められない。 聞き取り通訳：カセットテープから流れてくる音声を聞いて、手話に同時通訳する。 読み取り通訳（口頭）：録画された手話の表現を見て、日本語に同時通訳を行う。 読み取り通訳（筆記）：録画された手話の表現を見て、日本語の書き言葉に翻訳する。
評価者	非公開
評価の観点	聞き取り通訳については表現力、円滑性、速さ、態度の4項目、読み取り通訳（口頭）は表現力、速さ、明瞭性の3項目、読み取り通訳（筆記）は表現力、記述力の2項目に基づいて評価を行う。

図2　手話通訳技能認定試験（手話通訳士試験）の概要

2) 資格の更新

手話通訳には専門的な技術と知識が必要になるため、RIDでは専門技術の維持・向上のための研修プログラムを設けている。1994年から始まった資格維持プログラム（Certification Maintenance Program ; CMP)がこれにあたり、通訳資格の更新の際に必要単位以上の研修を受けていないと原則として資格の更新ができない形になっている。

このプログラムは、4年を1サイクルとしてCEUs（Continuing Education Units)と呼ばれる単位を取得していくもので、4年間で８CEUsの取得が課せられている。１CEUは 10時間の学習によって得られるため、4年で80時間の学習が求められていることになる。CEUsはRIDが定めたワークショップや講演会、研修会、大会等に参加することで得られるが、８CEUｓのうち６CEUsは言語学や通訳理論、法学、医学といった専門的な分野で取得することが求められる等、通訳サービスの質の向上に向けて取り組んでいる様子がうかがえる。今回参加したPEP-Netの大会も、このCEUsの単位として認められるということで、多くの通訳者が参加認定証を提出している様子を見かけたが、通訳として仕事を続けていく以上自己研鑽を積むのは当然といった様子で、中には参加認定証を提出するだけで実質的な勉強になっていない人もいるので、もっと厳しくしても良いのではという声も聞かれていた。

2. NADによる資格

RIDによって発行されている通訳資格の他に、全米で実施されている手話通訳資格試験としてNADによるものがあげられる。これはRIDに比較して、評価的側面の強い試験で、結果は個人ごとの評価シートとしてフィードバックされるとともに、１～５段階のレベルで示されることになっている。詳しい試験内容は図3の通りで、独自のレベル認定試験を有しているテキサス州以外では、公的な手話通訳の技能レベルとして用いることができる。アメリカでは、手話通訳者への給与は本人の所有している資格や技能レベルによって異なることが多いが、そういった雇用条件を決定する際にも、NADによる技能認定試験の結果が用いられることが多いようである。

なお、RIDによる通訳資格とNADによる資格は、図４のように対応づけられるとされており（Fischer, T.J., 1998)、これによるとNADの方がより幅広い通訳レベルを評価できることがわかる。

面　接	様々な通訳場面に関する倫理について質問がなされる。
実　技	6問の試験問題が提示され、これをビデオに登場する話し手に応じて英語やASL、対応手話を用いて通訳する。それぞれの問題は、日常会話場面から法律関係の場面まで内容は様々で、登場する聴覚障害者のタイプも異なる。
評価者	6～10名の評価者（ろう者、難聴者、通訳者）が実際の通訳状況を見て評定を行う。評定結果はカリフォルニアの本部に送られ、以下の5段階に評定される。 Level Ⅴ：Master Level Ⅳ：Advanced Level Ⅲ：Generalist Level Ⅱ：Intermediate Level Ⅰ：Novice

図3　NAD資格試験の概要

	RID	NAD	テキサス	州レベル
実施場所	全米＋α	全米	テキサス アリゾナ	各州
レベル（高）	―	―	Ⅴ	―
	SC:L MCSC	Ⅴ	Ⅳ	―
	CSC SC:PA CI/CT OIC:C RSC(ろう)	Ⅳ	Ⅲ	Ⅴ
	CI CT IC/TC OIC：S/V OIC:V/S RSC(聴)	Ⅲ	Ⅱ	Ⅳ
	IC TC	Ⅱ	Ⅰ	Ⅲ
（低）	―	Ⅰ	―	Ⅱ、Ⅰ

図4　各通訳資格レベルの対照表
Fischer, T.J.(1998) p8.より和訳の上転載　一部改

3. 統一の動き

本稿ではRIDとNADの二つの大きな全米における手話通訳資格について説明してきたが、実は1996年7月の全米ろう者大会ですでにこれら二つの試験を統一することが決定されており、以来続けられてきた審議が現在ほぼまとまりつつあるとのことである。PEP-Netの分科会の中でも、National Interpreter Certification (NIC)と称される統一試験実施については大きなトピックスとして取り上げられており、試験の実施方法や内容について、参加した多くの通訳者の中でも活発な議論がなされていた。表にはこの大まかな内容を掲載した。あくまで検討中の部分も多いが、今後手話通訳をめぐる動向として注目しておきたい内容である。

<table>
<tr><td>実施方法</td><td>1次試験と2次試験の2段階による実施
<table><tr><td>1次試験（筆記）</td><td>オンラインで受験者の都合に合わせていつでも受験可能。2004年6月より受験が開始されている。</td></tr><tr><td>2次試験（実技）</td><td>2005年6月に第1回試験実施予定。具体的な方法については現在検討中。通常の実技の他に、通訳倫理に関する口頭試問を実施する予定。</td></tr></table></td></tr>
<tr><td>資格内容</td><td>ASLによる通訳と対応手話による通訳は分けて考えるべきではないとの考えから、一般的な通訳資格は1つに統合される予定で、特に読み取りが強化されるとのこと。評定は3段階となるが、一番下の段階にあってもこれまでの通訳資格よりもさらに難易度が高くなる予定。

ただし、幼児を対象とした教育通訳は一般通訳とは分けて資格認定を行う。</td></tr>
<tr><td>倫理要綱</td><td>これまでRIDによって定められてきた手話通訳者の倫理要綱についても見直す予定で、現在ホームページ等を通して意見を収集中である。</td></tr>
<tr><td>その他</td><td>通訳には通訳内容に関する様々な専門知識が求められることから、健聴の通訳者に対しては2008年度までに何らかの分野での準学士（AA）、2016年度までに学士（BA）※を取得することを課す予定。</td></tr>
</table>

※ ろうの通訳者に対しては2012年度までに準学士、2016年度までに学士

図5　NIC試験の概要（案）

Ⅱ. 通訳者の養成

日米の手話通訳事情を考える際、最も大きな違いは手話通訳者の養成システムの違いであると思われる。我が国では、1989年に手話通訳士資格が制定されから15年以上経過しているのにもかかわらず、公的な養成機関はほとんどなく、福祉関係の専門学校で手話について学べる機関を含めても全国で８箇所（国立身体障害者リハビリテーションセンター学院手話通訳学科、世田谷福祉専門学校手話通訳学科など,2004年現在）程度しかなく、手話通訳者の養成のほとんどを地域で実施されるボランティア講座に頼っている現状にある。これに対し、米国での手話通訳者養成は基本的に短大や大学などの高等教育機関で正式なカリキュラムに則って行われるのが普通である。しかも、2001年の時点で手話通訳養成プログラムを持つ大学および短期大学が74校、このうち大学院修士課程レベルで養成を行っている機関が7箇所、大学学部レベルが53箇所(Programs and Services for the Deaf ,2001)あったが、現在は専門的な通訳者の養成のために大学院レベルでの教育を充実させるためにさらに運動が続けられているとのことである。

表3，4には、典型的なASL通訳の養成コースの例として、NTIDで用いられているカリキュラムの内容を示した。このコースはすでに基本的なASLを習得している学生を対象としており、2年間である程度の通訳技術を習得することを目指すAASコースと、さらに技術を向上させより上位の通訳資格の取得等を目指すBSコースの二つからなりなっている。詳細はNTIDのホームページや松藤（1997）によって紹介されているが、いずれのコースも入学前に面接試験があり、聴覚障害やろう文化に関する知識やASLの技術が判定されることになっているとのことである。必要なASLレベルについては明記されていないが、技術が満たない学生にはASLⅠ～Ⅲの受講を勧めるとのことなので、通常アメリカの大学や短大等で開講されているASLコースで1年間学習をした程度（日常的な会話なら流暢に手話で話せる程度）であると推察されよう。通訳コースの実際の内容については、杉江（1992）等が体験談を記載しているため、参考にしてほしい。

表３　ASL-英語通訳コースカリキュラム（AAS）

First Quarter	0875-211	Intercultural Communication for Interpreters
	0875-213	Introduction to Field of Interpreting
	0875-301	American Sign Language IV
	0504-225	Writing and Literature I
Second Quarter	0875-302	American Sign Language V
	0875-310	Discourse Analysis for Interpreters
	0875-311	Processing Skills Development
	0504-226	Writing and Literature II
Third Quarter	0875-303	American Sign Language VI
	0875-315	Voice to Sign Interpreting I
	0875-316	Sign to Voice Interpreting I
Fourth Quarter	0875-212	Deaf Culture and Community
	0875-325	Voice to Sign Interpreting II
	0875-326	Sign to Voice Interpreting II
	0505-XXX	Liberal Arts (Fine Arts)
	0507-XXX	Liberal Arts (History)
Fifth Quarter	0875-320	Practical and Ethical Applications
	0875-330	Introduction to Transliteration
	0508/9-XXX	Liberal Arts (Philosophy/Tech.)
	1001-XXX	Science
Sixth Quarter	0875-350	Practicum and Seminar I
	1016-XXX	Mathematics
	051X-XXX	Social Science
	051X-XXX	Social Science

※いずれも1講義4単位で、96単位取得することが求められる。１quarterは3ヶ月で夏休みを挟むため3quarterで1年となる。

表４　ASL-英語通訳コースカリキュラム（BS）

First Quarter	0875-411	Interpreting Frozen and Literary Texts
	05XX-XXX	Liberal Arts Concentration or Minor
	10XX-XXX	Science
	10XX-XXX	Science Lab
Second Quarter	0875-400	Advanced Interactive Interpreting
	0875-XXX	Interpreting Elective
	05XX-XXX	Liberal Arts Concentration or Minor
	10XX-XXX	Science
	10XX-XXX	Science Lab
Third Quarter	0875-415	Interpreting Practicum and Seminar
	0875-XXX	Interpreting Elective
	05XX-XXX	Liberal Arts Concentration or Minor
	1016-XXX	Mathematics
Fourth Quarter	0875-501	Advanced Sign to Voice Interpreting
	0875-502	Advanced Voice to Sign Interpreting
	0520-501	Senior Seminar
	05XX-XXX	Liberal Arts Concentration or Minor
	1016-XXX	Mathematics
Fifth Quarter	0875-515	Interpreting Internship
Sixth Quarter	0875-520	Issues in Interpreting
	0875-XXX	Interpreting Elective
	05XX-XXX	Liberal Arts Elective
	05XX-XXX	Liberal Arts Elective

※いずれも1講義4単位で、96単位取得することが求められる。１quarterは3ヶ月で夏休みを挟むため3quarterで1年となる。

III. 手話通訳者の労働条件

最後に通訳制度の質を高める上で重要な手話通訳者の労働環境について見てみたい。我が国にでは、役場や手話通訳派遣事務所に設置されているごく一部の手話通訳者をのぞいて、ほとんどの通訳者が県内の派遣事務所に登録し、必要な時にのみ派遣されるという登録通訳者の身分であることが多い。そのため、通訳謝金の低さはもとより、一定の収入が得られるという保証もなく、雇用保険等の加入対象にも

ならないため、非常に不安定な状況での労働を強いられる状況にある。

これに対してアメリカでは、日本と同様フリーランスで働く通訳者もいる一方で、会社や教育機関、病院等と雇用契約を結び、正職員としてフルタイムで働く通訳者も多く、中でも教育分野は大きなシェアを占めている。NTIDによると、アメリカの手話通訳者の70%が教育機関で働いているとのことで（NTID，2004）、2004年現在大学に雇用されている手話通訳者が全国で約2～3名といわれている我が国の現状とは大きく異なる点で注意が必要である。

これらの通訳者の身分保障の状態について、RID(2004)は手話通訳に関する紹介の中で、通訳者の年収は活動を行う地域や通訳者がこれまで受けてきた教育、通訳歴、取得している資格等によって異なるが、一般的にフルタイムで雇用されている手話通訳者は年間$15,000～$30,000程度の給与を得ていると記述している。また、高い技術を持った通訳者で、都心部で働いている場合であれば、年間$40,000～$50,000程度になることもあると述べられており、手話通訳士資格を取得しても職に結びつかない我が国の現状に比較して、かなり安定した労働条件にあることが推察される。

一方、表はPEP-Netにおいて中西部の中心を担っている中西部高等教育アウトリーチセンター（Midwest Center for Postsecondary Outreach; MCPO）が1998年に実施した調査結果を基に、高等教育機関で働いている手話通訳者の雇用状況について、平均的な状況をまとめたものである。これによると、大学によって通訳者の雇用規模や形態、身分保障の状況はかなりばらつきがあるが、ほぼRIDの指摘する年収の幅に収まっており、やはりフルタイムで大学に雇用されている手話通訳者の場合、通常の事務職員レベルの保障はなされていると見てよいだろう。ただし、手話通訳の職を高度専門職ととらえた場合に、現状の保障で十分であると言えるかについては議論の余地があり、今後さらなる改善も求められるといえる。

表5 高等教育機関における手話通訳者の雇用状況調査（（）内は平均）

※MCOP（2000）を元に作成

職員としての雇用通訳	契約期間	年収	月収	通訳時間／週	勤務時間／週	短期雇用の通訳者数	時給
0～19人（3．3人）	8～12ヶ月（10.4ヶ月）	$13000～55000（$27400）	$1833～3380（$2642）	15～31時間（25.2時間）	19～40時間（34.13時間）	0～23人（6.8人）	$7.5～40（$22.7）

【資料1】 RIDが発行している主な手話通訳資格

CI (Certificate of Interpretation)

Holders of this certificate are recognized as fully certified in Interpretation and have demonstrated the ability to interpret between American Sign Language (ASL) and spoken English in both sign-to-voice and voice-to-sign. The interpreter's ability to transliterate is not considered in this certification. Holders of the CI are recommended for a broad range of interpretation assignments. This test is currently available.

CT (Certificate of Transliteration)

Holders of this certificate are recognized as fully certified in Transliteration and have demonstrated the ability to transliterate between English-based sign language and spoken English in both sign-to-voice and voice-to-sign. The transliterator's ability to interpret is not considered in this certification. Holders of the CT are recommended for a broad range of transliteration assignments. This test is currently available.

CI and CT (Certificate of Interpretation and Certificate of Transliteration)

Holders of both full certificates (as listed above) have demonstrated competence in both interpretation and transliteration. Holders of the CI and CT are recommended for a broad range of interpretation and transliteration assignments.

CDI (Certified Deaf Interpreter)

Holders of this certification are interpreters who are Deaf or hard-of-hearing and who have completed at least 8 hours of training on the RID Code of Ethics, and 8 hours of training in general interpretation as it relates to the interpreter who is Deaf or hard-of-hearing and have passed a comprehensive combination written and performance test. Holders of this certificate are recommended for a broad range of assignments where an interpreter who is Deaf or hard-of-hearing would be beneficial. This test is currently available.

CSC (Comprehensive Skills Certificate)

Holders of this full certificate have demonstrated the ability to interpret between American Sign Language and spoken English and to transliterate between spoken English and a English-based sign language. Holders of this certificate are recommended for a broad range of interpreting and transliterating assignments. The CSC examination was offered until 1987. This test is no longer offered.

MCSC (Master Comprehensive Skills Certificate)

The MCSC examination was designed with the intent of testing for a higher standard of performance than the CSC. Holders of this certificate were required to hold the CSC prior to taking this exam. Holders of this certificate are recommended for a broad range of interpreting and transliterating assignments. This certificate is no longer offered.

RSC (Reverse Skills Certificate)

Holders of this full certificate demonstrated the ability to interpret between American Sign Language and English-based sign language or transliterate between spoken English and a signed code for English. Holders of this certificate are Deaf or hard-of-hearing and interpretation/transliteration is rendered in American Sign Language, spoken English, a signed code for English or written English. Holders of the RSC are recommended for a broad range of interpreting assignments where the use of an interpreter who is Deaf or hard-of-hearing would be beneficial. This certificate is no longer offered. People interested in this area should take the CDI exam.

SC:L (Specialist Certificate: Legal)

Holders of this specialist certificate have demonstrated specialized knowledge of legal settings and greater familiarity with language used in the legal system. Generalist certification and documented training and experience is required prior to sitting for this exam. Holders of the SC:L are recommended for a broad range of assignments in the legal setting. This test is currently available.

SC:PA (Specialist Certificate: Performing Arts)

Holders of this certificate were required to hold RID generalist certification (CSC) prior to sitting for this examination and have demonstrated specialized knowledge in performing arts interpretation. Holders of this certificate are recommended for a broad range of assignments in the performing arts setting. The SC:PA is no longer offered.

OTC (Oral Transliteration Certificate)

Holders of this generalist certificate have demonstrated, using silent oral techniques and natural gestures, the ability to transliterate a spoken message from a person who hears to a person who is deaf or hard-of-hearing and the ability to understand and repeat the message and intent of the speech and mouth movements of the person who is deaf or hard-of-hearing. This test is currently available.

OIC:C (Oral Interpreting Certificate: Comprehensive)

Holders of this generalist certificate demonstrated the ability to transliterate a spoken message from a person who hears to a person who is deaf or hard-of-hearing and the ability to understand and repeat the message and intent of the speech and mouth movements of the person who is deaf or hard-of-hearing. This certification is no longer offered. Individuals wishing oral certification should take the OTC exam noted above.

OIC:S/V (Oral Interpreting Certificate: Spoken to Visible)

Holders of this partial certificate demonstrated the ability to transliterate a spoken message from a person who hears to a person who is deaf or hard-of-hearing. This individual received scores on the OIC:C examination which prevented the awarding of full OIC:C certification. The OIC:S/V is no longer offered. Individuals wishing oral certification should take the OTC exam noted above.

OIC:V/S (Oral Interpreting Certificate: Visible to Spoken)

Holders of this partial certificate demonstrated ability to understand the speech and silent mouth movements of a person who is deaf or hard-of-hearing and to repeat the message for a hearing person. This individual received scores on the OIC:C examination which prevented the awarding of full OIC:C certification. The OIC:V/S is no longer offered. Individuals wishing oral certification should take the OTC exam noted above.

IC/TC (Interpretation Certificate/Transliteration Certificate)

Holders of this partial certificate demonstrated ability to transliterate between English and a signed code for English and the ability to interpret between American Sign Language and spoken English. This individual received scores on the CSC examination which prevented the awarding of full CSC certification. The IC/TC is no longer offered.

IC (Interpretation Certificate)

Holder of this partial certificate demonstrated ability to interpret between American Sign Language and spoken English. This individual received scores on the CSC examination which prevented the awarding of full CSC certification or partial IC/TC certification. The IC was formerly known as the Expressive Interpreting Certificate (EIC). The IC is no longer offered.

TC (Transliteration Certificate)

Holders of this partial certificate demonstrated the ability to transliterate between spoken English and a signed code for English. This individual received scores on the CSC examination which prevented the awarding of full CSC certification or IC/TC certification. The TC was formerly known as

the Expressive Transliterating Certificate (ETC). The TC is no longer offered.

（主要なもののみRIDのHPより転載）

＜引用文献＞

Fischer, T.J.(1998)Establishing a freelance interpretation business. Butte publications,

福田友美子()ヨーロッパ諸国の手話通訳―その2.情報文化センターGRAPE VINE,18,10-12

松藤みどり（1997）国立聾工科大学（NTID）における手話通訳養成プログラム. 聴覚障害者を対象とする日米大学の教育実践―筑波技術短期大学と国立聾工科大学（NTID）―. 筑波技術短期大学日米聴覚障害者大学教育研究会, 62-77.

McLeod, C. & Sanderson, G. (2004) NAD-RID National Council on Interpreting. PEP-Net Conference 2004 当日資料.

MCOP（2000）Salary Survey of Sign Language Interpreters in Post-Secondary Settings

NTID（2004）http://www.ntid.rit.edu/

NAD（2004）http://www.nad.org/

RID（2000）Generalist certification (CI and CT) examination information bulletin: Introduction to the national testing system.

RID（2004）http://www.rid.org/

杉江尚子（1992）アメリカでの大学の手話通訳養成課程での経験. ろう教育科学, 33(4), 193-200.

土谷道子（1996）アメリカにおける手話通訳について.情報文化センターGRAPE VINE, 24-25.

植村英晴（1978）アメリカ合衆国の手話通訳―システムの成立とその発達―.全日本ろうあ連盟.

アメリカの障害者差別禁止法

松崎 丈（宮城県・仙台市聴覚障害学生情報保障支援センター代表）

Ⅰ. はじめに

アメリカは、障害者への差別を禁止する法律を作った国家として有名である。この法律のおかげで、アメリカにおける聴覚障害者の高等教育支援が、日本よりも数十年早く進歩した。ここでは、高等教育支援の発展の契機となった主な法律として、障害を持つアメリカ人法とリハビリテーション法 第504条の2つをとりあげ、以下、それぞれの法律の概要と、両者の法律の特色の違いを紹介する。

Ⅱ. 障害を持つアメリカ人法 (ADA：Americans with Disabilities Act)

1990年に制定されたADAは、障害者への差別を禁じ、機会平等を保証している。ADAは、①雇用における差別禁止、②不特定多数の集まる公共的施設における差別禁止、③交通機関における差別禁止、④聴覚障害者の相互通信に使われているTDDに対するリレーサービスの４章で構成されている。

同年７月２６日に、ブッシュ大統領が、多くの障害者や関係者が出席したセレモニーでこのADA制定に関する署名を行ったことにより、全てのアメリカ人は、「これからは、障害という理由で差別することが違法なのだ」ということを知ることになった。障害者自身も、紛れもなく自分はアメリカ人としての公民権を持っているのだ、と誇りを持って公言することができるようになった。

ただし、公民権法であるADAは、福祉法でも保護法でもないため、あらゆる障害者をカバーしているとは限らないことがある。たとえば、雇用においてはそこでの差別禁止が適用される障害者は、その仕事において中心となる業務内容を満たす能力を持っている者に限られている。つまり、その能力を持つ障害者(ADAでは、「有資格障害者」とよぶ)であれば、雇用上の差別を除去してもらうことはできるが、そうでない場合は残念なことにADAが適用されない。いわば、ADAというのは、有資格障害者を優先した差別禁止法とも言え、重度の脳性マヒを持つ者、要介護高齢者などはその対象除外とされるということになってしまう。まさに、アメリカが資本追求の経済論理・能力主義国家であるからこそ、これを反映した法律「ADA」が誕生したのだろうと思われる。ゆえに、ADAは、すべての障害者にとって100%完璧かつ充分な法律ではなく、今後も改善が必要とされる発展途中の法律である。

III. リハビリテーション法 第504条
(The Section 504 of the Rehabilitation Act)

この法律は、1973年にアメリカで初めて制定された障害者差別禁止法として有名である。その法律では、「…単に障害者という理由で、連邦政府からの財政的援助を伴う施策・事業への参加において排除されたり、その利益を享受することを拒否されたり、ないしは差別されてはならない」と明記している。連邦政府直営や政府から助成金を受けている諸機関・諸事業（具体的には、教育・医療・福祉・公共施設などの公的・行政サービスの事業部門）における障害者差別を禁止している。教育分野では、大学も当然含まれている。

アメリカで聴覚障害者の高等教育が日本よりも数十年早く発展したのは、その第504条によるところが大きい。なぜなら、聴覚情報を獲得することが困難な聴覚障害学生にとっては、入学、学業、学生生活において音声を中心に行われることは明らかに不利益を被ることになり、それは差別とみなされ、連邦政府からの補助金がカットされるからである。アメリカの教育省は、この第504条に基づいて、「高等教育における障害者差別の禁止に関する施行規則」を作った。同規則の実施によって、カリフォルニア大学における聴覚障害学生数が1980年～1990年の間に52名から139名へ3倍も増加した。このように、聴覚障害学生のいる大学すべてに、手話通訳などの情報保障が義務づけられ、設備やサービスの不備を理由に受け入れを拒否するケースが激減していったのである。

ちなみに、第504条は、ADAのひな型として活躍した。実は第504条に、教育上の差別を禁止する際、連邦政府から補助金を受けている諸機関・諸事業にしか適用できないという問題が指摘されていた。つまり、それ以外の諸機関（企業や私立学校）などで差別が生じても適用されなかったのである。したがって、前述のADAは、第504条の問題点を解消し、かつ法律の適用範囲をさらに雇用関係、民間事業者、情報通信サービスまでに拡張した法律ということがいえる。

図1　ADA法について解説したハンドブック
ADA法が正しく理解され活用されるように、聴覚障害学生やサービスコーディネーター、雇用主等を対象としたハンドブックも多数作成されている。

表　リハビリテーション法第504条と障害を持つアメリカ人法の比較

	リハビリテーション法 第504条 Section 504	障害を持つアメリカ人法 ADA
目標（役割）	連邦政府の財政的援助を受けている政府機関、教育機関などの公共施設に、障害のある人がメインストリームされるように最大限の可能性と機会を供給するように求める	504条が対象とした範囲を広げて、連邦政府の援助を受けているかに関係なく、雇用、私立も含む教育機関、交通機関、聴覚障害者のテレコミュニケーションの4点を新たに加える
障害の定義	障害(disability)のある人： ① 身体的または精神的に障害（impairment）を持ち、生活において1つまたはそれ以上の活動制限を伴っている場合 ② 以上のような障害（impairment）を持っていた場合 ③ 障害（impairment）を持っているとみなされる場合	504条が定めた障害の定義とは本質的に同じであるが、HIV（ヒト免疫不全ウイルス）、伝染性、非伝染性の病気を持つ人も障害の(disability)ある人のなかに含める
保護	障害(disability)のある人が教育上の差別を受けないように保護する	同左
サービス	通常学校におけるプログラム及びサービスにおいて多数の構成員から特定の生徒に及ぼすようなバリアを除去する	同左
財源	学校に対して、生徒の障害(disability)に基づいて差別せず、かつ適切な調和を図るように要求するが、そのために新たに行う支援サービスや補助･援助について財政的援助を行うことはない	同左

＜参考文献＞

八代英太・富安芳和 1991 障害を持つアメリカ人法ＡＤＡの衝撃. 学苑社.

しみずよりお 2004 聴覚障害者が見たアメリカ社会―障害者法と情報保障. 現代書館.

アメリカのろう教育システム

松崎 丈（宮城県・仙台市聴覚障害学生情報保障支援センター代表）

Ⅰ．アメリカの教育システム

まず、アメリカの一般的な教育システムを紹介する。

初等・中等教育では、日本と同じ６年（小学校）－３年（中学校）－３年（高校）制で行う州もあるが、むしろ５－３－４制の方が標準的である。この他にも６－６制、８－４制などが採用されている（下図参照）。高等教育が高校終了以降の教育のことを指すのは日本と同じである。

高等教育では、大学学部と大学院のシステムは日本と同じだが、唯一日本にはないシステムが1つある。それは、２年制大学であるコミュニティ・カレッジで、日本の短期大学との主な共通点は、卒業と同時に準学士号を取得すること、準学士には専門分野において学士号が与えられるプログラムと、４年制大学へ編入するためのプログラムがあること。一方、日本の短期大学と異なっているのは、地域住民対象の生涯教育コース、高校課程コースに加えて、成人の聴覚障害者のための特別プログラムも提供されていること。しかも、希望すれば、年齢や障害に関係なく全員入学できる。地元にある場合は、無試験で入学が許可される場合もあるときく。

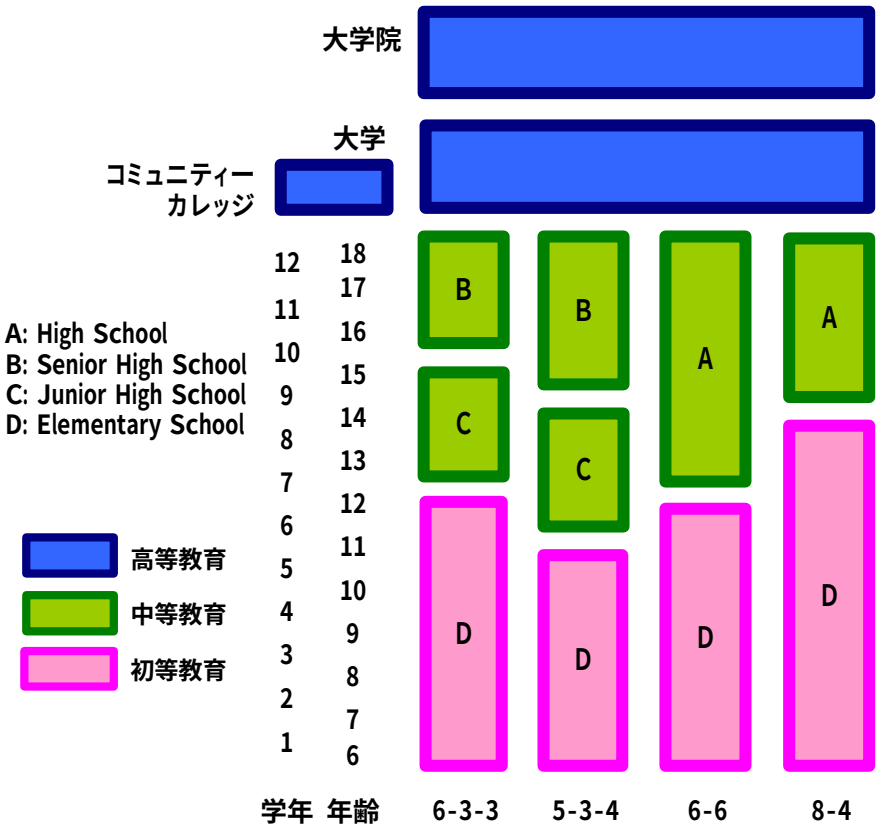


図1　アメリカの教育システムの概要

II. ろう教育の形態

次に、聴覚障害児童生徒を対象にしたろう教育システムについて紹介する。初等・中等教育におけるろう教育の形態については、次のように4つの主要な選択肢がある。

1.寄宿制聾学校

日本における寄宿舎のある聾学校と同じである。これらの学校のほとんどが週末に生徒たちを家で家族たちと過ごさせる計画を立てているが、残りの時間はすべて寄宿させている。近隣に居住している生徒は、通学生としてこれらの寄宿制聾学校へ通学している場合もある。

2.通学制聾学校プログラム

このプログラムの聴覚障害生徒は、年少の聴覚障害生徒たちだけが通う聾学校に行き、午後は他の学校の子どもたちのように家に帰る。

3)固定制特殊学級

地域にある公立学校の多くが、聴覚障害生徒に特殊学級を提供している。このプログラムのもとで聴覚障害生徒は体育や美術の時間に健聴の生徒と一緒に勉強する、あるいはある学級では通訳士とともにメインストリームされる場合がある。これらのプログラムを行うのに、ふつうは、健聴の生徒と一緒のクラスでの聴覚障害の生徒の情報保障を助けるためにリソースルーム（通級指導教室）が用意されている。

4.通常学級

メインストリーミングともいい、聴覚障害生徒に1日中かあるいは1日のほとんどを健聴生徒のいる通常学級で過ごす。通訳士やチューター、リソースルーム教師が用意されることもある。

高等教育におけるろう教育については、職業訓練プログラムを選択するか、通常の大学ないしギャローデット大学や、アメリカ聾工科大学（NITD）のように聴覚障害者のための大学に進学することを目的とする大学進学コースを選択する。さらに、前述したように、成人の聴覚障害者に対する特別プログラムを備えた多くのコミュニティ・カレッジや専門学校もある。

III. ろう教育における言語指導

聴覚障害児は音声言語を自然に獲得することが難しいため、音声言語を身につけるための言語指導が行われる。アメリカの場合、聴覚障害児に対する言語指導方法

について、最近の調査研究の報告によれば、ASL (American Sign Language) を第一言語として獲得し、それを基盤に書記英語を習得するバイリンガル・バイカルチュラルアプローチが、全米のろう学校の半数以上で行われている。それに次いで、口話併用手話 (Sign With Speech)、ASL、聴覚口話、キュード・スピーチを導入しているろう学校がある。

長年、聴覚口話法およびトータル・コミュニケーションによる言語指導法が実践されてきたが、現実は、この指導法を受けた聴覚障害者の発音、読み書き能力、学力のいずれも、同年齢の聴者の平均能力より低い傾向があることが、多くの調査研究によって明らかにされている。

一方で、1960年代から、手話言語学や手話言語発達研究が台頭することにより、手話 (ASL) は、音声言語に共通する言語構造を持ちながらも、かつ手指動作と非手指動作 (首振り・頷き・体の傾きなど) の組み合わせによって、言語要素の空間的な配列も行うという複雑な体系を有していることがわかってきた。こうして、言語学者や教育者の間で、乳幼児期から自然言語としての手話を獲得すること、それを前提に第二言語として音声言語（主に読み書き能力）を習得するための認知能力、社会性、アイデンティティを育てていくことが重要であると認識されるようになった。そして1990年代から、聴覚口話法とトータル・コミュニケーションに変わる新たな教育的アプローチとして、バイリンガル・バイカルチュラルアプローチが台頭しはじめた。

現在では、聴覚障害児に対するバイリンガル教育の成果として、第一言語としての手話獲得は第二言語の読み書き能力と学力の習得に有効に働いていること、かつ同年齢の聴児と同等あるいはそれ以上の力を身につけることを可能にしているという報告がなされている。ところで、この成果報告によって、聴覚口話、口話併用手話、キュード・スピーチなどの言語指導方法が排除されるべき対象になったというわけではない。最近は、第一言語として手話を充分に獲得することを前提とした上で、音声言語の読み書きを習得させるための手段として、聴覚口話、口話併用手話、キュード・スピーチなどの指導方法がどれほどの効果を持っているのかについて見直す必要性が指摘されるようになり、調査研究が行われている。

このように、アメリカのろう教育の現状は、手話と音声言語の読み書き能力の両方ともきちんと身につけるためにバイリンガル教育を中心に行っていきつつある一方で、これまで行われてきた聴覚口話や対応手話などの指導方法はバイリンガルろう教育の枠組みの中でどれほどの効果を持っているかを見直していく段階にあるといえる。

PEN–International(聴覚障害のための国際大学連合)とその活動について

須藤 正彦（筑波技術短期大学障害者高等教育センター助教授）

荒木 勉（筑波技術短期大学聴覚部機械工学科助教授）

「聴覚障害者のための国際連合」（以下、PEN-International）は聴覚障害者の高等教育の必要性に応えるための世界で初めて組織された国際高等教育機関ネットワークである。2001年に創設されたPEN-Internationalは、アメリカ合衆国におけるNTID（国立聾工科大学）に本部を置いている。 PEN-Internationalは世界中の大学で学ぶ聴覚障害学生が、技術分野においてよりよい質の教育機関で学べるようにするために、その指導方法や専門技術の共有を目指している。

PEN-Internationalの主要目標は、以下の通りです。

教授法、学習法、カリキュラムの発展、指導方法の改善 情報技術が応用される機会、就労の機会を増加させること

Ⅰ. 主要協定校

アメリカ聾工科大学（米国）が**筑波技術短期大学（日本）**の協力と共に、PEN-Internationalのリーダーシップを担っている。**アメリカ聾工科大学（NTID）**は世界初の聴覚障害学生のための技術系の大学である。ニューヨーク州ロチェスター工科大学（RIT）の中にあり、８つの学部の中の１学部であるNTIDは、13,500人の健聴学生と約1100人の聴覚障害学生が、共に学び、生活し、交流している。そして聴覚障害学生に対して、多様なプログラムと情報保障のサポート等を提供している。1987年に創立された**筑波技術短期大学（TCT）**は視覚障害、聴覚障害のための、国立三年制大学である。筑波技術短期大学は、教養を持った有能な学生を育成し、社会・経済的に独立出来る卒業生を送り出すことを目標としている。筑波技術短期大学の聴覚障害部は、デザイン、機械工学、建築工学、電子工学ならびに情報科学のカリキュラムを３学年で総計150人の学生達に提供している。

Ⅱ. 加盟校

天津聾工学院（中国）は、PEN-Internationalに加わった、最初の協定校である。当校は、天津工科大学内にあり、聴覚障害者に対して高等教育を提供する工科大学である。1991年に創立されたこの機関は、機械製造学、コンピューター科学、衣服デザイン学科、経営情報学等の専門教育を提供している。約150人の聴覚障害学生と50人の専門教員が大学に所属している。

新たに2002年度にPEN-Internationalに以下の２校が加わった。

モスクワ州立工科大学（ロシア）は、ロシアにおける優秀な工科大学である。

1934年以来、聴覚障害学生を教育してきた当大学は、1990年初期に聴覚障害学生センターを設立した。200人を超える学生達が大学内の多様な専門学部や、基礎準備コースにて学んでいる。

セイントベニルデカレッジ(フィリピン)は、De La Salle大学の中の一つである。セイントベニルデカレッジは、創造性豊かで専門的に優れ、また個人の個性を尊重、フィリピン人の理想であるような学生の育成を目標としている。この大学では約200人の聴覚障害学生が学んでいる。

表1　PEN-International加盟大学

大学の名称	創立年	課程	教職員数	学生数
ロチェスター工科大学・アメリカ聾工科大学（アメリカ・ロチェスター）	1967年	３年制（準学士）。情報工学系、工学技術系、芸術・デザイン系RITへの学士、修士進学コースあり。	教職員525名 内通訳専門職員等100名以上	1,100名(NTID)
デルサレ大学セントベルニデカレッジ（フィリピン）	1980年	1991年聴覚障害者のための会計学の短期コース、工学デザインの４年制学士コース設置	専任教員 約60名	総学生数 4～5000人 うち聴覚障害者 約200人
長春大学特殊教育学院（中国・長春）	1987年	1995年に４年制へ転換	教職員68名 うち教員45名	400名
モスクワ　バウマン工科大学（ロシア・モスクワ）	1994年	4年制、修士課程、理工系	教官75名、 事務職員56名 （手話、筆記通訳者18名含）	156名
天津聾工学院・天津工科大学 （中国・天津）	1991年	2001年に４年制への転換理工系コンピューター専門、服飾デザインの職業訓練コース他	教官30名 事務職員5名 外に併任教職員	150名
北京連合大学特殊教育学院（中国・北京）	2000年	特殊教育（健常者４年制）、聾４年制（聴力言語リハビリ、芸術デザイン）、盲４年制（鍼灸推拿学）他	助教授以上51人	

PENのホームページは以下の通りで、加盟大学名、調印式、これまでの各国の教官や学生交流の様子、教官の学習セミナー等の様子をみることができる。

http://www.pen.ntid.rit.edu

写真左：PEN-Internationalカンファレンス2004の様子
中央右が日本手話通訳者、左がアメリカ手話通訳者。他に、各国語通訳者も同席。発表者はフィリピン代表。

写真右：PEN-International カンファレンス2004参加者
アメリカ、中国、フィリピン、ロシア、日本の5カ国より代表者が出席。

PEN–International(聴覚障害のための国際大学連合)とその活動について

我が国と中国の天津の交流は、筑波技術短期大学から教官が情報機器の設定、聴覚学の講演、学生・教官の派遣に始まり、天津聾工学院の教官・学生の日本訪問へと続いてきた。これらの交流を通じて、教官も学生も互いの国の文化、教育について理解を深めるとともに指導技術の向上や当該教育について視野を広めることができた。

米国との共同事業として、調印式(2001年)の際に手話を取り入れた日米俳句コンテストが開かれ、好評を博した。その様子もホームページで見ることができる。同年にはNTIDの教官と学生が日本と中国を訪問し、また技術短大の学生・教官が中国の教官・学生とともに米国を訪問した。こうした交流が加盟大学間で行われ、現在はTV会議システムを用いて定期的に会議がもたれている。

写真右：中国聴覚障害学生芸術作品展（2004年）
中国3大学より代表団を招聘し、筑波技術短期大学にて各大学学生による作品展を開催。

写真左：中国とのテレビ会議の様子（2003年）
PEN-Internationalの各加盟大学にはテレビ会議システムが導入されており、日常的にコミュニケーションが可能になっている。

写真左：中国とのペーパーカーレース（2003年）
テレビ会議システムを用い、中国と日本の間でペーパーカーレースを開催。地域のろうの子どもも参戦して大いに盛り上がった。

（日本福祉大学障害学生支援センター主催海外視察報告会資料「聴覚障害学生支援の最前線」掲載原稿を一部修正の上転載）

写真：空から見たロチェスター市。左上がロチェスター工科大学

写真：ロチェスター工科大学周辺の風景

写真：ロチェスター工科のシンボルとなっているロチェスタータイガー像

付録

PEPNetパンフレット	69
NETACパンフレット	71
全視察日程	73
ロチェスター工科大学およびNTID視察日程	74
ロチェスター工科大学の位置	75
ロチェスター工科大学構内地図	76

写真：日本からの視察団

PEPNet Provides

- Technical Assistance
- Training
- Biennial Conferences
- Distance Learning Opportunities
- Publications
- Training Materials
- Financial Aid Information
- Consultations
  - Faculty/Staff Development
  - Administration Development
  - Enhancement of Support Services
- On-line Learning Opportunities
- Transition Services

PEPNet ...
Taking higher and higher the postsecondary education of students who are Deaf and Hard of Hearing.
Call your Regional Center Today.

PEPNet is a national collaborative effort. For more information, contact your Regional Center.

Midwest Center for Postsecondary Outreach (MCPO)

St. Paul Technical College
235 Marshall Avenue
Saint Paul, MN 55102
(651) 846-1550(V)
(651) 846-1527(TTY)
(651) 221-1339 (Fax)
Email: patty.brill@sptc.mnscu.edu
Raymond Olson, Director

Northeast Technical Assistance Center (NETAC)

National Technical Institute for the Deaf, a college of Rochester Institute of Technology
52 Lomb Memorial Drive
Rochester, NY 14623-5604
(585) 475-6433 (V/TTY)
(585) 475-7660 (Fax)
Email: netac@rit.edu
Dianne K. Brooks, Director

Postsecondary Education Consortium (PEC)

The University of Tennessee
Claxton Complex A507
Knoxville, TN 37996-3400
(865) 974-0607 (V/TTY)
(865) 974-3522 (Fax)
Email: pec@utk.edu
Donnell Ashmore, Director

Western Region Outreach Center & Consortia (WROCC)

California State University Northridge
18111 Nordhoff Street
Northridge, CA 91330-8267
Toll Free (888) 684-4695 (V/TTY)
(818) 677-4899 (Fax)
Email: wrocc@csun.edu
Dr. Merri C. Pearson, Director

http://www.pepnet.org

PEPNet is funded through the Individuals with Disabilities Education Act (IDEA), US Department of Education, Office of Special Education and Rehabilitative Services.

PEPNet

Postsecondary Education Programs Network

Providing Technical Assistance to Postsecondary Institutions Serving Individuals Who Are Deaf and Hard of Hearing

PEPNet Mission

The mission of PEPNet is to promote coordination and collaboration among the four Regional Postsecondary Centers for Individuals Who Are Deaf and Hard of Hearing. PEPNet's goal is to provide technical assistance to postsecondary educational institutions providing access and accommodations to individuals who are deaf or hard of hearing.

PEPNet Objectives

- To improve postsecondary access and transition opportunities for individuals who are deaf or hard of hearing.
- To develop a national design for technical assistance and outreach service delivery to assure that postsecondary institutions and the students they serve will benefit from PEPNet's collaboration and coordination efforts.
- To expand the knowledge and skill of postsecondary institutions related to the provision of educational support services for deaf and hard of hearing students.
- To cooperate with secondary and postsecondary institutions in developing outreach strategies and disseminating information to individuals who are deaf to enhance their awareness of available postsecondary opportunities.
- To increase the postsecondary enrollment, retention, graduation, and employment rates of students who are deaf and hard of hearing.

PEPNet Stakeholders

The four PEPNet Regional Centers provide technical assistance and facilitate a collaborative network of *communication and consortia among two and four-*year colleges, vocational training and rehabilitation programs, adult education programs, private and public community service agencies, secondary education personnel, deaf and hard of hearing individuals, consumer and professional organizations, state and national organizations and clearinghouses.

Midwest Center for Postsecondary Outreach

Saint Paul Technical College is the site of the Midwest Center for Postsecondary Outreach (MCPO). For over 30 years St. Paul Technical College has been a leader in providing technical education and assisting deaf and hard of hearing students from across the U.S. to successfully complete career training and become gainfully employed. MCPO serves the Midwest Region which includes the states of Illinois, Indiana, Iowa, Kansas, Michigan, Minnesota, Missouri, Nebraska, North Dakota, Ohio, South Dakota and Wisconsin.

Northeast Technical Assistance Center

The Northeast Technical Assistance Center (NETAC) is located at Rochester Institute of Technology in Rochester, New York. NETAC is supported by one of RIT's colleges, the National Technical Institute for the Deaf, the world's first and largest technological college for deaf and hard of hearing students. NTID's mission is to provide deaf and hard of hearing students with outstanding state-of-the art technical and professional education programs, complemented by a strong liberal arts and science curriculum that prepares them to live and work in the mainstream of a rapidly changing global community and enhances their lifelong learning. NETAC's region includes the states and territories of Connecticut, Delaware, District of Columbia, Maine, Maryland, Massachusetts, New Hampshire, New Jersey, New York, Pennsylvania, Puerto Rico, Rhode Island, Vermont and the Virgin Islands.

The Southern Region is served by the Postsecondary Education Consortium (PEC) located in the Center on Deafness at the University of Tennessee, Knoxville. PEC has a long history of providing technical assistance to postsecondary institutions across the region and currently serves Alabama, Arkansas, Florida, Georgia, Kentucky, Louisiana, Mississippi, North Carolina, Oklahoma, South Carolina, Tennessee, Texas, Virginia and West Virginia.

WROCC
Western Region Outreach Center & Consortia
California State University Northridge

The Western Region Outreach Center and Consortia (WROCC) is located at the National Center on Deafness at California State University, Northridge. Since 1963, the National Center on Deafness has been a leader in the development and delivery of innovative support services to the largest number of deaf and hard of hearing students enrolled in a mainstream university in the region. WROCC serves the states and territories of Alaska, American Samoa, Arizona, California, Colorado, Guam, Hawaii, Idaho, Montana, Nevada, New Mexico, Northern Marianas Islands, Oregon, Utah, Washington and Wyoming.

We've got experience

The Northeast Technical Assistance Center (NETAC) was established in 1996 by the U.S. Department of Education, Office of Special Education and Rehabilitative Services (OSERS), to help improve existing postsecondary education support services or to establish new services for students who are deaf and hard of hearing.

The other regional centers are the Midwest Center for Postsecondary Outreach at St. Paul Technical College in St. Paul, Minnesota; the Postsecondary Education Consortium at the University of Tennessee, Knoxville; and the Western Region Outreach Center and Consortia at California State University, Northridge.

The common goals of these four centers are:

- To increase access and transition opportunities for students who are deaf and hard of hearing
- To expand the knowledge and skills of those who work with students who are deaf and hard of hearing
- To enhance resources and increase the amount of information available to institutions who want to improve their support services
- To increase enrollment, retention, and graduation rates for postsecondary students who are deaf and hard of hearing

Contact us today

For more information about NETAC, please visit us on-line at *http://netac.rit.edu*
Or contact us at:

Northeast Technical Assistance Center
Rochester Institute of Technology
National Technical Institute for the Deaf
52 Lomb Memorial Drive
Rochester, NY 14623-5604
(585) 475-6433 (V/TTY)
(585) 475-7660 (Fax)

netac@rit.edu
http://netac.rit.edu

This publication was developed under a grant from the U.S. Department of Education, Office of Special Education and Rehabilitative Services (OSERS) and produced through a cooperative agreement between RIT and USERS (H324A000002). The contents herein do not necessarily represent the Department of Education's policy nor endorsement by the Federal Government.

5000 12/03 Printing Methods, Inc.

Northeast Technical Assistance Center

One of four regional centers dedicated to working with secondary and postsecondary institutions to improve educational access and enhance educational opportunities for students who are deaf and hard of hearing

Located at the
National Technical Institute for the Deaf,
one of eight colleges of Rochester Institute of Technology, Rochester, New York

We've got connections

NETAC works with two- and four-year colleges, proprietary programs, secondary schools, vocational training programs, adult education programs, private and public community service agencies, consumer and professional organizations, state and national organizations, and individuals.

We've got a long-range plan

NETAC has been funded through 2006. This means that those needing information and support can contact us at our central office, located at RIT, or can contact a NETAC-designated "site coordinator" directly. NETAC serves Connecticut, Delaware, District of Columbia, Maine, Maryland, Massachusetts, New Hampshire, New Jersey, New York, Pennsylvania, Puerto Rico, Rhode Island, U.S.Virgin Islands, and Vermont.

We've got information you can use–in print or on the Web

NETAC offers a variety of free publications on topics related to working with students who are deaf and hard of hearing, including an extensive *Teacher Tipsheet* series; an informational guide, "Financing Your Education"; a training package, "ACCESS: How Best to Serve Postsecondary Students Who Are Hard of Hearing"; a Proprietary Schools resource directory; and lots of other information that's current. All of NETAC's written publications are available on our Web site at http://netac.rit.edu.

We've got C-Print ™

The nationally acclaimed C-Print™ project, begun at NTID in 1990, is an important resource available through NETAC. This speech-to-print classroom transcription system is one of the country's premier accommodation strategies. C-Print™ is one of several technological innovations available through NETAC.

We've got workshops, internships, and "tips" galore

NETAC offers local and regional workshops on cutting-edge topics such as how to help students plan for life after high school; how vocational rehabilitation and colleges can work together to assist students who are deaf and hard of hearing; and how to assimilate employees who are deaf and hard of hearing into the workplace. NETAC offers internships that allow professionals who work with deaf and hard-of-hearing students to visit various sites within the NETAC region to hone their skills in areas such as teaching, grant writing, and providing support services to students.

Finally, NETAC offers more than two dozen free *Teacher Tipsheets* that offer concise information on topics relevant to deaf education.

We've got tomorrow's issues today

NETAC has information on "hot" topics such as transitioning to college, assistive listening devices, on-campus accessibility, voice recognition technology, interpreting, legal issues involving deaf and hard-of-hearing students, and more.

We've got time...for you

NETAC's staff members pride themselves on being able to respond quickly to inquiries relevant to our mission. If we don't have the answer, we'll find it...and soon. NETAC has a national network of professionals who usually can respond to questions within just a few days. NETAC staff members are real persons with real solutions!

第1回アメリカ視察スケジュール表

	4月14日 水		4月15日 木	4月16日 金	4月17日 土	4月18日 日	4月19日 月
8:00							
9:00		9:05　シカゴ着	NTID 見学＆ワークショップ	NTID 見学＆ワークショップ	NTID 見学＆ワークショップ	9:40　ﾛﾁｪｽﾀｰ発（US4638）	
10:00						10:55　ピッツバーグ着	10:00～16:00 PEN-I ワークショップ
11:00	11:45　成田発（JL010）	11:28　シカゴ発（AA4470）					
12:00							
13:00							
14:00		14：00　ロチェスター着					
15:00							
16:00							
17:00							
18:00							
19:00							
20:00～							
宿泊	Radisson Hotel Rochester Airport (RIT campus)					Sheraton Station Square	
ADD	175 Jefferson Rd.　Rochester, NY 14623					7 Station Square Drive　Pittsburgh, PA 15219	
TEL	585-475-1910					412-261-2000	
FAX	585-475-9633					412-261-2932	

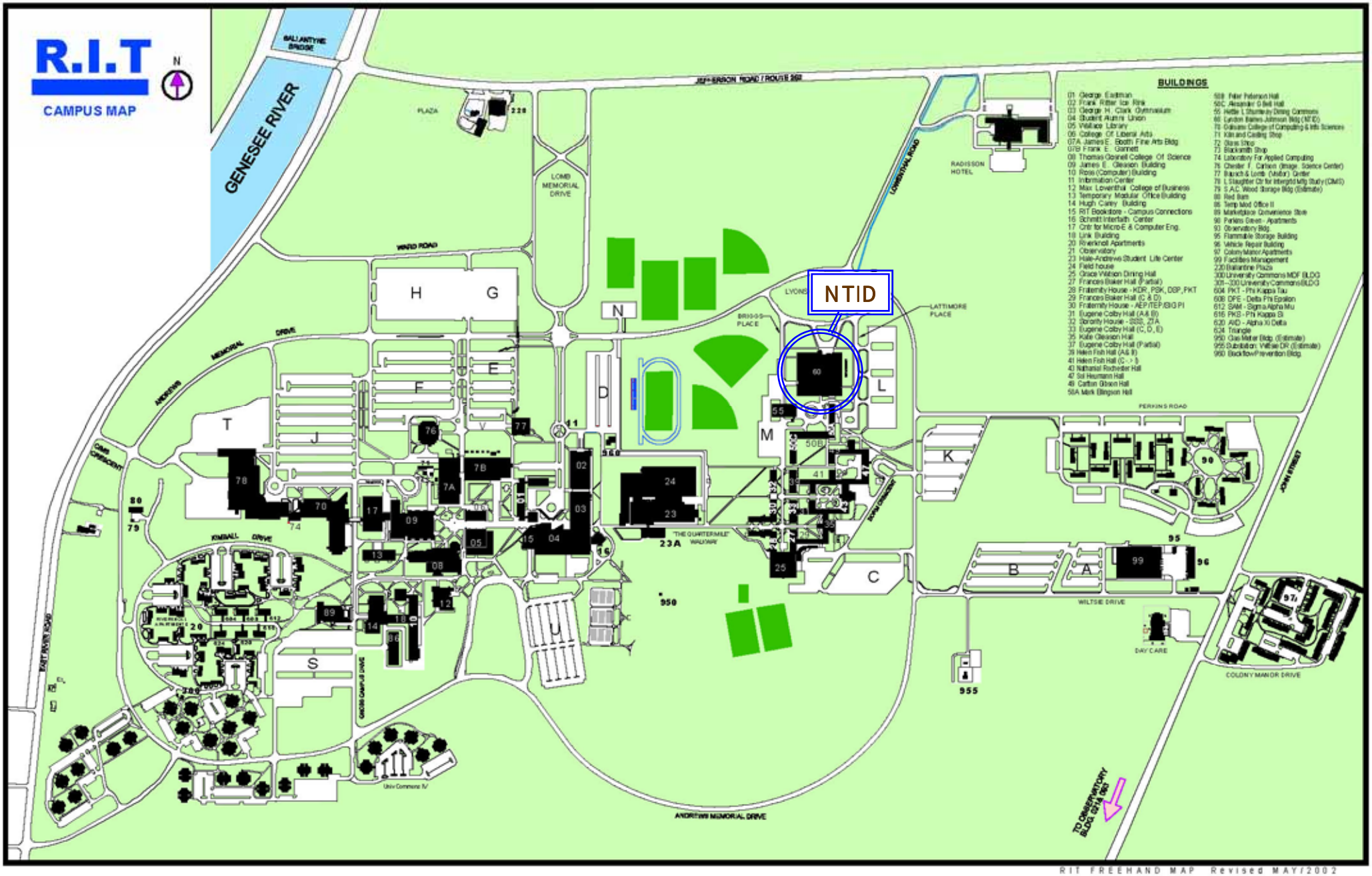
	4月20日 火	4月21日 水	4月22日 木	4月23日 金	4月24日 土	4月25日 日	
8:00							
9:00					9:31 ﾋﾟｯﾂﾊﾞｰｸﾞ発（AA4170）		
10:00	10:00～16:00 PEN-I ワークショップ	10:00～13:30 PEN-I ワークショップ	PEPNet ワークショップ	PEPNet ワークショップ	10:01　シカゴ着		
11:00					11:35　シカゴ発（JL009）		
12:00							
13:00		13:30～16:00 PEPNet ワークショップ					
14:00						14:40　成田着	
15:00							
16:00							
17:00		17:00～19:00 PEPNet オープニングセレモニー					
18:00							
19:00							
20:00～							
宿泊	Sheraton Station Square				機内泊		
ADD	7 Station Square Drive　Pittsburgh, PA 15219						
TEL	412-261-2000						
FAX	412-261-2932						

NTID Visitation: Delegation from Japan
14 April – 18 April 2004

	Wednesday, April 14	Thursday, April 15	Friday, April 16	Saturday, April 17	Sunday, April 18
7:30			Group – Breakfast at hotel **Ishii and Tsutsui mtg. with DeCaro in PEN Conference Room**	Breakfast at hotel	Hotel shuttle to airport
8:00		Working Breakfast and PEN Orientation (PEN Conference Room)			
9:00			Notetaking Services-Pat Rahalewicz (COB)	Meeting w/ DeCaro and Clymer Regarding Future Plans in Japan (PEN Conference Room)	9:40 depart for Pittsburgh USAir # 4638
10:00		NTID Learning Center-Jeff Porter	Tutoring Services-Jim Biser		
11:00		NTID Self Instruction Lab-Cheri McKee			
12:00		Lunch/Overview of RIT/NTID Support Services-Peter Lalley (PEN Conference Room)	Lunch at Crossroads	Afternoon & evening free	
1:00		C-Print demonstration-Pam Francis (PEN Conference Room)	Counseling Services-Robb Adams		
2:00	Ms. Tsutsui arrives UA #7244 Group Arrival – AA #4470	Visit Financial Accounting Class I n College of Business (see support services)	Assistive Listening Devices – Larry Scott		
3:00		Walking tour of campus	Interpreting Services-Ken Finton		
4:00		4:30 depart for Dinosaur BBQ for dinner		Group Dines at Hotel	
5:00		5:41 Mr. Ishii arrives US#3829	Dinner at hotel	**Ishii and Tsutsui business dinner with DeCaro**	

ロチェスター工科大学の位置

ロチェスター工科大学構内地図



聴覚障害学生サポートネットワークの構築をめざして
― 第1回 アメリカ視察報告書 ―

発行：日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク
PEPNet-Japan：Postsecondary Education Program Network of Japan

〒305-0005
茨城県つくば市天久保４-３-15
筑波技術短期大学　障害者高等教育センター
聴覚・視覚障害学生の大学教育に関する相談・支援室　聴覚系WG 内
PEPNet-Japan事務局　白澤麻弓

※PEPNet-Japanは日本財団の助成によるPEN-Internationalの事業の一部です。